

第12回

阿武隈水系研究会

発表要旨集

2021年12月26日

主催：宮城県考古学会阿武隈水系研究会
共催：あづま街道探訪会

目 次

	頁
縄文早期前葉日計式土器の年代と広域編年 —宮城県白石市松田遺跡のAMS年代測定から—	相原 淳……………1
縄文中期末葉から後期初頭土器の変遷と三十稻場式土器について ～宮城県柴田町台遺跡から～	土岐山 武……………15
宮城県白石市小原産玉髓の産状とその利用 —宮城県蔵王町大久保遺跡（縄文後期）の事例—	鈴木 雅……………27
福島県国見町の史跡「阿津賀志山防壁」について ～文治五年奥州合戦の実証遺跡～	安田 稔……………35
宮城県白石市大平鉢森山伝承の館跡について	佐藤 充……………41
刈田郡湯原城跡 新版 片倉家中「小関家」文書	吉井 宏……………47
一片倉家中中級武士の知行受給— 大正11年の宮小学校と小野さつき訓導の授業 —小野さつき訓導遺徳顕彰館所蔵資料から—	立田 基生……………53 佐藤 洋……………59
風船爆弾になった和紙 ～福島県上川崎産和紙～	安斎 克仁……………65
震災復興の10年 ～宮城県山元町から～	田代 侃……………73
講評	東北大学名誉教授 阿子島 香

時：2021年12月26日（日） 会場：白石市中央公民館

縄文早期前葉日計式土器の年代と広域編年

—宮城県白石市松田遺跡の AMS 年代測定から—

相原 淳一（東北歴史博物館）

はじめに

宮城県白石市福岡深谷に松田遺跡は所在する。阿武隈川の支流白石川の西側低位段丘上、標高約 50m に立地する。遺跡は東北自動車道建設に先立つ 1971 年の第 1 次と仙南仙塙広域水道建設に先立つ 1981 年の第 2 次の 2 回、発掘調査が行われている（第 1 図）。第 1 次調査は概報が 1972 年、正式報告書には概報が再録された（宮城県教育委員会 1972・1982b）。第 2 次調査報告書は 1982 年に刊行された（宮城県教育委員会 1982a）。発掘調査では、日計式土器を伴う竪穴住居跡 3 軒、竪穴状遺構 3 基が確認された。2021 年 3 月には、東北歴史博物館の相原淳一が出土土器の再整理を行い、中央大学教授小林謙一・東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室が土器に付着する炭化物の AMS 年代測定を行った（相原ほか 2021）。

本稿は、これらの調査成果に基づき、日計式土器の年代と広域編年について、考察する。

1. 第 1 次調査

基本層序は、表土（1 層）20～30 cm、2 層汚れたローム層、3 層砂質ローム層である。

第 1 次 1 号住居跡（第 2 図②）

1 号住居跡は I-17 区を中心に、汚れたローム層上面で確認された。住居内堆積層は、暗黒茶褐色～暗褐色微砂質土層（2a～2b 層）、暗黄褐色～暗褐色砂質土層（3a～3c 層）、汚れたローム層（4・5 層）である。

遺物は住居内の層位別に示された。今回、報告書に掲載されなかった資料も含めて調査した。遺物



第 1 図 宮城県白石市松田遺跡の位置と遺構配置図

の取り上げは、①I -17 表土、②I -17 2層、③I -17 3層、④住居内3層、⑤住居内3層ナンバーリング遺物、⑥床面の順で行われている。ナンバーリングは、No.112まで確認される。報告書には「豎穴内の堆積土から土器片39点、石鐵1点、搔器4点、剥片および碎片（チップ）88点、合計133点の遺物が出土」したことが記されており、石器類にもナンバーリングが施され、取り上げられたものと考えられる。

1層出土土器は確認されず、I -17 表土に一括されたものとみられる。住居床面からは、石皿の半欠品1点が出土した。

①2層出土土器（1～2） 土器は2点、うち1点は纖維が混和されておらず、縄文後期の土器である。

②3層出土土器（3～21） 土器39点のうち19点を図示。接合資料や同一個体破片を含む。土器の胎土にはすべて纖維が混和されている。器形は平縁（口唇部に指頭状圧痕が連続するものがある）、尖底である。器厚は概して薄手である。縄文と押型文、撫糸文が施され、縄文と押型文には横位平行沈線文が加えられるものがある。横位平行沈線文には一本書き、二本一組、多条沈線となるものがある。底部付近は無文である。

縄文は横帯施文による斜行縄文で、6は帯を入れ替えて羽状構成になるものとみられる。縄文の種類は多く、通常の単節縄文のほかにLRO段3条、LRL1段多条、RL2本附加条がある。縄文末端結縛部（6b）や縄文末端部を強調して回転施文したもの（11）がある。

押型文は重層山形文と1点のみ平行線状押型文（19）が確認された。種類は少ない。

撫糸文は2点（12^{*1}・15）あり、左傾（12）、右傾（15）するものがあり、12はやや太い撫紐（R）、15は細い撫紐（R）を軸に絡げている。

* 1 相原ほか 2021では、相原が12を縄文（LR）と誤認した。撫糸文（R）に訂正する。

【年代測定】 年代測定用に5点の土器内面に付着する炭化物を採取したが、年代測定に充分な量を得ることができなかった。



①松田遺跡近景（北から）



②第1次1号住居跡（南から）

第2図 松田遺跡近景（1981年）と第1次1号住居跡（1971年）



第3図 松田遺跡第1次1号住居跡出土土器

2. 第2次調查

基本層序は、1層（I a層）表土、2層（I b層）黒褐色シルト層、3層（II層）黒褐色シルト層（黒ボク層）、4層（III層）褐色シルト層：上面が遺構確認面で、多くの遺物が出土した。5層（IV層）ローム層である。

遺物にはほとんど注記が施され、文様別に登録番号が付された。報告書では遺構別に床面、堆積土の順に、堆積土出土遺物は一括して文様別に示された。

ここでは、土器の注記と登録番号に基づき、層位別に掲載する。必要に応じて、再実測や探拓、写真撮影を行った。遺物台帳は所在不明であるが、登録番号を付した際の遺物カードが残されていた。一部に確認することができなかった資料がある。

A. 第2次1号住居跡（第4図）

第1次1号住居跡の西北西約20mで検出された。風倒木による攪乱が大きく入っている。堆積層は3層あり、報告書ではほとんどが第1層から出土したとするが、遺物注記は2層から始まっている。ここでは、注記に従い、風倒木による攪乱等が及ぶ2層までは扱わず、3層以下ののみを再掲する。

① 3層出土土器（第5図1～3）

住居壁近くから中央部にかけて堆積する褐色土層ある。遺物は少ない。

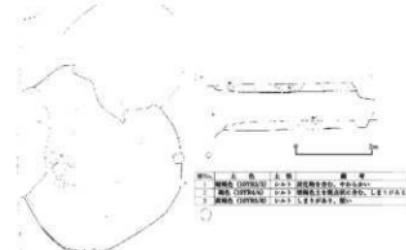
1は横位平行線状文が施されている。2は重層山形文上に横位平行線状文が施されている。3は底部近くの無文部片である。胎土にはすべて繊維が混和されている。

②最下層出土土器（第5図4～15）

住居壁沿いの黄褐色土層である。遺物は少ないが接合する破片や床面に同一個体がある。出土器の胎土にはすべて纖維が混和されている。

4は粗大なL繩文が施され、やや太い平行沈線文が描かれている。床面土器（第5図18）に類似する。5も粗大なRL繩文が施され、土器の胎土は4に類似している。

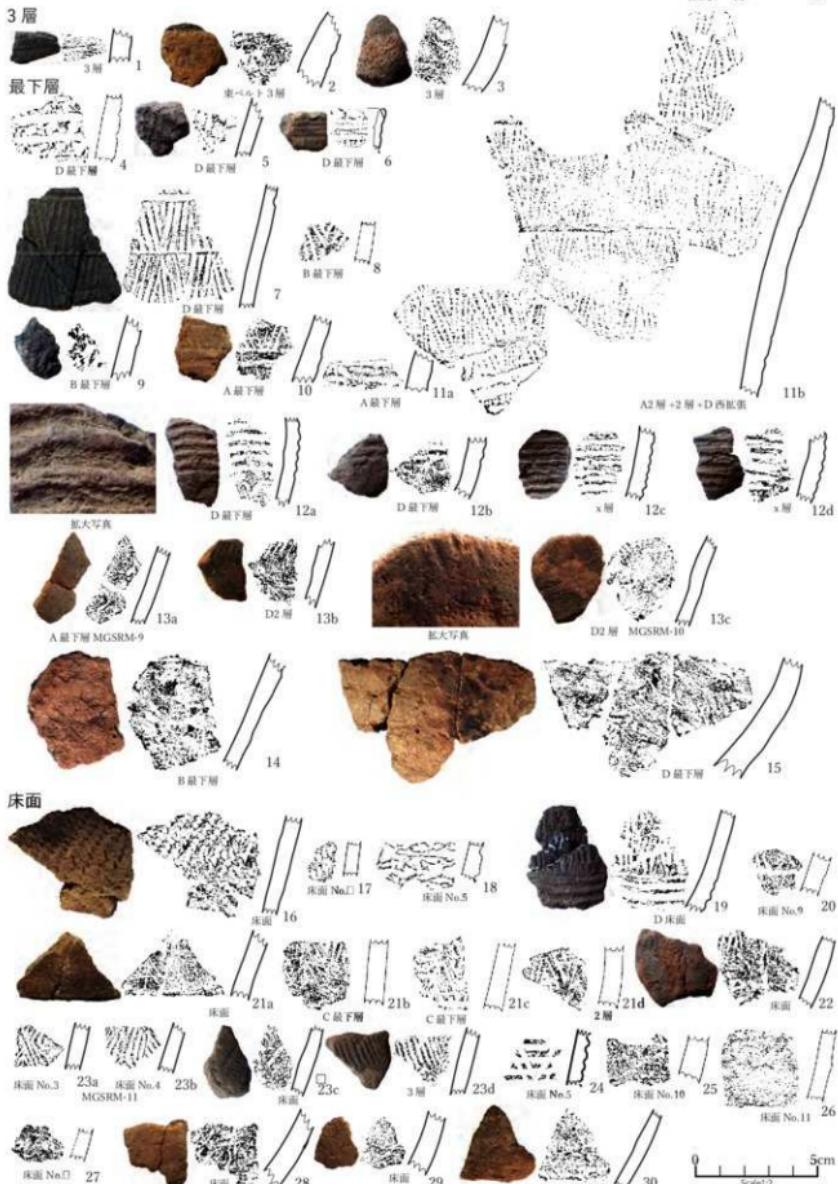
6～11は押型文が施される土器である。6は口縁部で薄く剥落している。口縁端部外角には細かな指頭状圧痕が連続して施されている。押型文はごく浅い縱位の条線で、角棒回転文、あるいはなんらかの自然物回転文である。横位平行沈線文が施されている。7は2段の重層山形文の上位に横位



①第2次1号住居跡

② 同平面図・断面図

第4図 松田遺跡第2次1号住居跡



第5図 松田遺跡第2次1号住居跡3層以下出土土器

沈線文が施されている。8・9は重層山形文が施されている。10は胴下部に重複菱形文（重層文？）を施した後に、平行線状文を施している。11は胴部に重複菱形文を施し、胴下部に幅広の沈線をめぐらしている。

12は横走する太く燃り合わせた燃糸文（直前段多条LRI）が胴下部にめぐる。燃りが判然としない部分があり、横位平行線状文を施したのちに、燃糸文を施している可能性もある。

13は胴下部の小片で、内面に炭化物が付着し、同一個体として識別できる。極細の多条沈線が右傾（13a・13c）、左傾（13b）しており、重層山形状、あるいは襷掛け状の構成をとるものと考えられる。底丸の沈線内にはごく細かい条線が確認される。以下の無文部はケズリが施されている。

14・15は胴下部から底部近くである。14の最上部に横位沈線文が残る。

③床面（第5図16～30）

ナンバリングして平面図に記録して取り上げたものと、単に床面として取り上げたものがある。土器の胎土にはすべて纖維が混和されている。

16～18は縄文施文土器である。16は非結束羽状縄文（LR、RL）である。17はLR縄文、18は粗大なLR縄文のうちに横位平行沈線文を施している。

19～23は押型文土器である。19は胴下部に重層山形文を施し、以下には横位平行沈線文を施している。沈線文は太さにばらつきがある。20は重複菱形文、21・22は重層山形文が施されている。23は皮膜状に炭化物が付着しており、同一個体と識別できる。重複菱形文が施文されている。

24はやや太描きの横位平行沈線文を施したのちに、重層山形状に2本の沈線文を配している。25～30は胴下部から底部にかけての無文部破片である。

【年代測定】

A最下層出土の13aと同一個体のD2層中出土の13cの胴下部破片の内面付着炭化物（試料名：MGSRM-10）において、年代測定が行われた。結果は、 $8,900 \pm 30BP$ (TKA-22886)、IntCal20による歴年較正年代（1σ）は $10,158 \sim 9,916calBP$ 、同（2σ） $10,177calBP$ (95.4%) $9,905calBP$ である。

B. 第2次2号住居跡（第6図）

第2次1号住居跡の南南西約33mで検出された。住居跡のほぼ中央には、風倒木による攪乱が大きく入り、床面の一部に達している。堆積層は2層あり、第1層は住居壁近くから中央部にかけて、第2層は住居壁沿いから中央部にかけて、いずれも褐色土で、凸レンズ状に堆積している。

遺物の取り上げ層位では3層土器が2点ある。非纖維土器の4・5は2号住1層土器として登録されたが、報告では遺構外出



第6図 松田遺跡第2次2号住居跡

土遺物として掲載されている。住居中央に風倒木による攪乱が大きく入り込んでいるための判断とみられる。同じく非織維土器の 16 は 2 号住 2 層土器として登録され、報告書にはそのまま掲載された。

細別層位不明（第 7 図 1～3）

縄文施文土器（1・2）、重層山形文土器（3）ある。

①1 層（第 7 図 4～15）

全体的にやや摩滅した破片が多い。軟質の 5・9・11・15 は破片の形状自体がややくなっている。4・5 以外はすべて胎土に纖維が混和されている。

4・5 は集合沈線文が施されている。4 は左傾した集合沈線文のうちに、右傾した集合沈線文を施している。5 は疎らな右傾する細沈線文のうちに密なやや右傾する集合沈線文を施している。

6・7 は縄文施文土器である。ともに胎土には纖維が混和されている。6 は LRO 段多条縄文が横帯施文されたのうちに、横位平行沈線文が施されている。7 は薄手の縄文（RL）施文土器である。

8～15 は押型文が施されている。8 は同一個体が第 2 次 1 号竪穴 3 層に 1 点ある。重層山形文を施したのうちに、平行線状文を施している。9～11 は平行線状文が施され、9・10 は以下に重層山形文が施されている。9 の口縁部は平坦に整えられ、上部に彫去状に浅い刻目文が施されている。12 は重層山形文施文後に、横位平行沈線文を施している。13～15 は重層山形文の一部である。

②2 層（第 7 図 16～31）

16 は非織維土器である。胴下部にミガキ調整を加えたのちに太描きの斜位沈線文をケズリ状に連続して施している。17 は纖維がわずかに混和されている。胴下部に棒状施文具による太描き沈線文がほぼ縦位に施されている。18 もわずかに纖維が混和され、海綿状骨針を多く含有する。外面は丁寧に磨かれている。

19～24 が縄文施文土器である。いずれも胎土に纖維が混和されている。19・22・23 が非結束羽状縄文で、19 は条の走行を菱形状、23 は山形状に整えている。19・20・23 が 0 段多条單節縄文、24 が 1 段多条複節縄文である。23・24 には横位平行沈線文が施されている。

25～30 は押型文土器である。すべて纖維が混和されている。重層山形文か重複菱形文に 27・28 は横位平行沈線文、29・30 は平行線状文が施されている。30 は胴下部である。

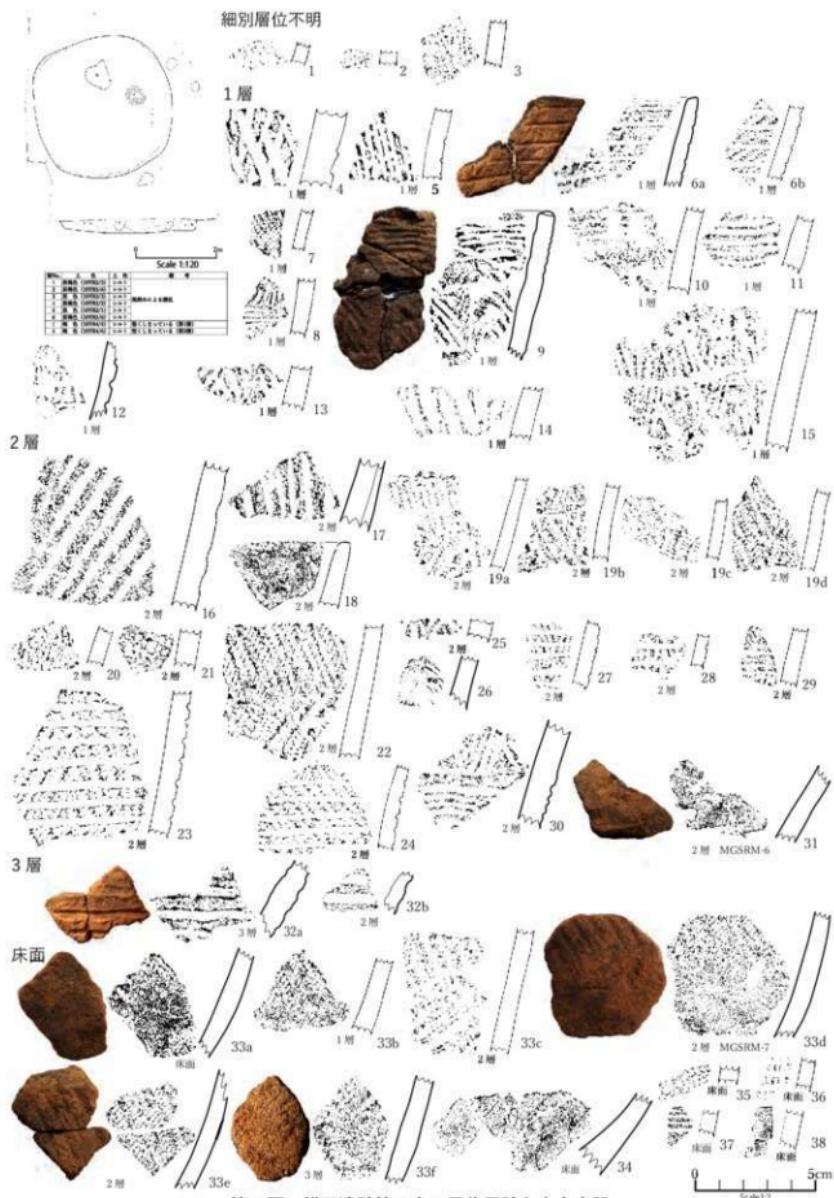
31 は胴下部の無文部破片である。胎土には纖維が混和されている。外面はナデのうちにミガキが施されている。内面には炭化物が付着しており、年代測定（MGSRM-6）を行った。床面の胴下部の無文土器（34）は胎土から同一個体の可能性があるが、特定には至らなかった。

③3 層（第 7 図 32）

32 は底部近くの破片で赤変している。端部平坦な割箸状の施文具による太描き横位平行沈線文が施されている。胎土には纖維が混和されている。

④床面（第 7 図 33～38）

32 は同一個体で、破片が 1 層～床面まで分散する。砂質の特徴的な胎土をしており、纖維が混和されている。0 段多条の非結束羽状縄文である。34 は胴下部の無文部である。外面はミガキである。35～38 がナンバリングして取り上げられた床面の土器である。35 は LR 縄文施文土器、36 は重層



第7図 松田遺跡第2次2号住居跡と出土土器

山形文に横位平行沈線文を施したもの、37 は平行線状文を施したものである。38 は胴下部の無文部である。すべて胎土に纖維が混和されている。

【年代測定】

2 層出土の 31 の胴下部破片の内面付着炭化物（試料名：MGSRM-6）において、年代測定が行われた。結果は、 $10,045 \pm 64\text{BP}$ (TKA-22823)、IntCal20 による暦年較正年代（1σ）は $11,725 \sim 11,400\text{calBP}$ 、 $10,177\text{calBP}$ (95.4%)、 $9,905\text{calBP}$ 、同 (2σ) は $11,817\text{calBP}$ (95.1%)、 $11,311\text{calBP}$ (0.3%) である。

3. 松田遺跡の日計式土器

今回、特に住居跡の暗黄褐色を基調とする下部堆積層および床面出土土器を中心に、改めて再検討を行った。文様別に整理すると、第 1 表とのおりである。ここでは、参考までに、松田遺跡から 5.6 km 北北東に位置する蔵王町鍛冶沢遺跡（第 8 図：宮城県教育委員会 2010・相原ほか 2021）と、日計式土器を考える上で研究史上欠くことのできない岩手県蛇王洞洞穴遺跡第Ⅷ層出土土器（第 9 図：芹沢・林 1965）との比較検討を行う。鍛冶沢遺跡では主として遺物包含層第Ⅳd 層から日計式土器が出土している。若干の野島式～後期後葉ころの土器の混入がある。三戸式土器は出土していない。蛇王洞第Ⅶ層は粗粒の砂層で、第Ⅵ層からは蛇王洞Ⅱ式（三戸式後半に併行：相原・佐藤 2021）が出土している。第Ⅶ層出土土器はいずれも小片で、第Ⅵ層と比べて遺存状況は悪い。

松田遺跡住居跡の日計式土器は、第 1 次 1 号住では縄文（多）・押型文（少）、第 2 次 1・2 号住では縄文（少）・押型文（多）の組成上の違いがあり、僅かに撫糸文を伴っている（第 1 次 1 号住・第 2 次 1 号住）。鍛冶沢遺跡では、縄文施文土器そのものが僅少で、押型文土器が多い。

松田遺跡	日計式以外	縄文		撫糸文		押型文（重層山形・垂唇変形文）			沈線文	無文（部）	計
		縄文	回+先端文	押型文	回+先端文	回+平行線伏文	平行線伏文				
第1次1号住	1（後期）	1								2	
	①2層 ②3層	4	7	2	1	3	1			1	19

松田遺跡	日計式以外	縄文		撫糸文		押型文（重層山形・垂唇変形文）			沈線文	無文（部）	計
		縄文	回+先端文	押型文	回+先端文	回+平行線伏文	平行線伏文				
第2次1号住	①3層 ②最7層 ③床面	1	1	1	2	3	1	1	1	1	3
		2	1		4		1		2	1	12
									1	6	15

松田遺跡	日計式以外	縄文		撫糸文		押型文（重層山形・垂唇変形文）			沈線文	無文（部）	計
		縄文	回+先端文	押型文	回+先端文	回+平行線伏文	平行線伏文				
第2次2号住	①1層 ②2層 ③3層 ④床面	2(三戸式)	1	1	3	1	4			12	
		3(三戸式～無文)	4	2	2	2		2		1	16
								1		1	
			2			1		1		2	6

参考

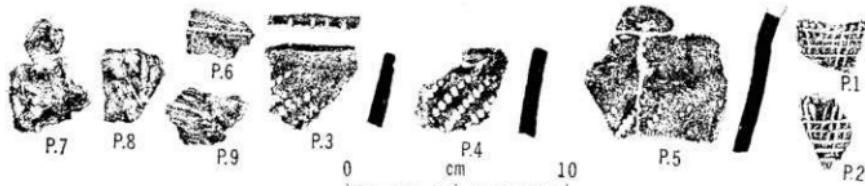
鍛冶沢遺跡	日計式以外	縄文		撫糸文		押型文（重層山形・垂唇変形文）			沈線文	無文（部）	計
		縄文	回+先端文	押型文	回+先端文	回+平行線伏文	平行線伏文				
Nv b・Nv d層、Nv d層	> 4 (野島式、後期後葉ころ)		3		12	6	4	8	1		> 38

蛇王洞第6 (若干層)	日計式以外	縄文		撫糸文		押型文（重層山形・垂唇変形文）			沈線文	無文（部）	計
		縄文	回+先端文	押型文	回+先端文	回+平行線伏文	平行線伏文				
第VI層	縄文+斜段文 (口唇部) 2 縄文+横位押型文 1 薄手無文 (含む貴品) 3				2				1		

第 1 表 松田遺跡住居跡出土の日計式土器



第8図 錫冶沢遺跡第IV b・IV d層出土土器



第9図 蛇王洞窟遺跡第VII層出土土器

①縄文 松田遺跡第1次1号住では、斜行縄文が単純に横帶施文を重ね、帯を入れ替えて横位羽状の構成となる可能性のものがある。縄文の種類では、単節縄文のほかに、0段多条、1段多条、附加条がある。縄文末端結縛部や縄文末端部を強調して回転施文したものがある。第2次1号住では、横帶非結束羽状縄文、斜行縄文があり、粗大な縄文がある。同2号住では、横帶の中に条の走行が山形状、菱形状に整えられた横帶非結束羽状縄文がある。0段多条、1段多条縄文が多い。

松田・鍛冶沢遺跡とともに、口唇部には指頭状圧痕が施されるものがあり、蛇王洞遺跡（第9図）にみられる平坦口縁上面に連続する刻目文や押圧縄文（縄の側面圧痕文）はみられない。これらは新潟県室谷洞窟遺跡（中村・小片 1964）や青森県樋町遺跡（青森県教育委員会 1999）に類例があり、縄文草創期に属するものである。

②燃糸文 松田遺跡第1次1号住で、やや太い燃糸（R）が左傾・細い燃糸（R）が右傾するものがある。第2次1号住では横走する太く撫り合わせた燃糸文（直前段多条 LRL）が脣下部にめぐる。撫りが判然としない部分があり、横位平行線状文を施文したのちに、燃糸文を施している可能性もある。鍛冶沢遺跡・蛇王洞遺跡では出土していない。宮城県赤坂遺跡、岩手県風林遺跡・大新町遺跡に類例がある。

③押型文 松田遺跡第1次1号住では、重層山形ないしは重複菱形文のみの構成である。蛇王洞遺跡の押型文土器と同様の構成である。松田遺跡第2次調査では、重層山形文・重複菱形文の内部を斜線で充填するものがわずかにみられる。これらは、斜位充填文様の施される関東地方の「複合鋸歯文」「異形押型文」と共通する文様のつくりとなっている。

鍛冶沢遺跡では、「V字状押型文」（武田 1969）と「菱形格子目押型文」（相原 1978）の組合せなど、松田遺跡にはみられない異種押型文がある。類例が山形県羽黒神社西遺跡（山形県埋蔵文化財センター 2020）にあり、新潟・長野県に分布する「日計式南漸土器」の文様のつくりは類似する。

④沈線文 縄文・押型文施文後に、横位平行沈線文が施されるものは、松田遺跡第1次1号住・第2次1号住、同2号住、鍛冶沢遺跡、蛇王洞遺跡においてもみられる。描線は単独で施されるものほかに、2本1組、櫛歯状工具による多条沈線がある。底部近くに、割箸状の工具によるやや太描きの横位平行沈線が施される土器が松田遺跡第2次2号住・鍛冶沢遺跡にある。蛇王洞遺跡の無文地に横位平行沈線文が施される土器は、施文具は異なるものの、こうした土器の類型に属するものかもしれない。このほか、山形状の意匠が単独・多条沈線によって描かれるものが松田遺跡第2次1号住、斜位平行沈線文が施されるものが鍛冶沢遺跡にある。

⑤無文 松田遺跡・鍛冶沢遺跡とともに、脣下部の無文部である。唯一の例外として、松田遺跡第2次2号住2層から出土した口縁部破片がある。わずかに纖維が混和され、海綿状骨針を多く含有し、明らかに胎土が異なる土器である。外面は丁寧に磨かれている。福島県等に分布する関東地方の燃糸文土器終末期の無文土器の搬入品の可能性があろう。

蛇王洞遺跡の指頭状圧痕の著しい薄手無文土器は松田遺跡・鍛冶沢遺跡では出土していない。宮城県藏王町上原田遺跡（林 1965・相原 2016）や岩手県上台1遺跡（花巻市博物館 2005）に類例がある。

4. 日計式土器の広域編年

松田遺跡の年代測定は、第2次1号住 MGSRM-10 で 10,177calBP (95.4%) 9,905calBP、同2号

第2表 東北地方を中心とした縄文時代草創期～早期中葉土器の年代測定（1）

第3表 東北地方を中心とした縄文時代暮創期～早期中葉土器の年代測定（2）

住 MGSRM-6 で 11,817calBP(95.1%) 11,311calBP が得られた。MGSRM-10 の年代は青森県二枚橋(1)遺跡(青森県教育委員会 2017)、岩手県尺沢遺跡(洋野町教育委員会 2020)で得られた 10,510 ~ 9,697calBP(±1σ) に収まり、齟齬がない。この土器には多条沈線文が施されており、新潟県黒姫洞穴(入広瀬村教育委員会 2004)の縦位襷掛け状の沈線文土器の年代 10,395 ~ 9,930calBP(±1σ)ともほぼ同じである。福島県大村新田遺跡(福島県教育委員会 1989)の撫糸文土器や柄木県登谷遺跡(登谷遺跡調査団 2002)の無文土器(天矢場式)と年代的には併行関係にある(相原 2020)。

MGSRM-6 の測定値はこれまでにない年代であり、今後さらに類例を集める必要性がある。年代的には岩手県上台 I 遺跡や山形県日向洞窟遺跡 5 層土器(長井編 2019)とほぼ重複する。また、関東以西の押型文土器で最古とされる大川式系土器の年代が 12,030 ± 360calBP・12,010 ± 560calBP(三重県鴻ノ木遺跡)、11,660 ± 290calBP(岐阜県諸家遺跡)(谷口 2011)とされており、繩文草創期から押型文土器の成立を考える上でも、極めて重要な測定結果であり、今後の課題としたい。

* 松田遺跡出土土器の所蔵は東北歴史博物館である。写真・図の引用は、宮城県教育委員会 1972・1982ab・2010 および相原淳一ほか 2021、芹沢長介・林謙作 1965 による。

引用参考文献

- 相原淳一 1978 「宮城県南部発見の菱形格子目押型文土器」『山麓文化』1,pp.12-17,白石地方文化研究所
 相原淳一 2016 「宮城県における薄手無文土器の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』17,pp.7-30
 相原淳一 2020 「日計式土器とその周辺—その年代と併行関係、および層位学的再検討—」『九州縄文時代早期研究ノート』6, pp.21-41,九州縄文時代早期研究会
 相原淳一・小林謙一・東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室 2021 「宮城県における日計式土器とその周辺」『東北歴史博物館研究紀要』22,pp.1-28
 相原淳一・佐藤信行 2021 「縄文早期中葉「大穴式」土器の再検討」『宮城考古学』23,pp.135-152
 青森県教育委員会 1999 「櫛引遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 263
 青森県教育委員会 2017 「二枚橋(1)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 581
 青森県教育委員会 2021 「林ノ脇遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 620
 入広瀬村教育委員会 2004 「黒姫洞穴遺跡」入広瀬村報告 1
 神原雄一郎 2009 「盛岡における縄文時代草創期・早期の土器」『盛岡の縄文時代草創期・早期の土器文化資料集』
 小林謙一 2019 「縄紋時代の実年代講座」同成社
 芹沢長介・林謙作 1965 「岩手県蛇王洞穴」『石器時代』7,pp.1 ~ 16,石器時代文化研究会
 武田良太 1969 「盛岡市上堤頭・小屋塚遺跡の押型文土器」『考古学ジャーナル』36,pp.8-12,ニューサイエンス社
 谷口康浩 2011 「縄文文化起源論の再構築」同成社
 長井謙治編 2019 「日向洞窟遺跡」日向洞窟遺跡発掘調査団
 中村孝三郎・小片保 1964 「室谷洞窟」長岡市立科学博物館
 登谷遺跡調査団 2002 「登谷遺跡調査報告書」茂木町埋蔵文化財調査報告書 3
 花巻市博物館 2005 「上台 I 遺跡発掘調査報告書」花巻市博物館調査研究報告書 2
 林謙作 1965 「縄文文化の発展と地域性 東北」『日本の考古学』II,河出書房新社
 福島県教育委員会 1989 「大村新田遺跡」福島県文化財調査報告書 207
 福島県文化振興財團・加速器分析研究所 2016 「まほろん所蔵資料の AMS 年代測定結果報告(平成 26・27 年度分)」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2015』
 福島県文化振興財團・加速器分析研究所 2019 「まほろん所蔵資料の AMS 年代測定結果報告(平成 30 年度分)」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2018』
 三浦武司・加速器分析研究所 2019 「まほろん所蔵資料の放射性炭素年代及び炭素・窒素安定同位体比分析の 5 か年の総括報告」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2018』
 洋野町教育委員会 2020 「尺沢遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書 8
 宮城県教育委員会 1972 「松田遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区)』宮城県文化財調査報告書 25
 宮城県教育委員会 1982a 「松田遺跡」仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書 II』宮城県文化財調査報告書 88
 宮城県教育委員会 1982b 「松田遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書 VII』宮城県文化財調査報告書 92
 宮城県教育委員会 2010 「銀治沢遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書 222
 山形県埋蔵文化財センター 2020 「羽黒神社西遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書 239

縄文中期末葉から後期初頭の土器の変遷と三十稻場式土器 ～宮城県柴田町台遺跡から～

土岐山 武（元仙台市歴史民俗資料館長）

I はじめに

2019年10月の令和元年東日本台風（台風19号）は柴田町にも甚大な被害を与えた。宮城県柴田町台遺跡周辺でも斜面の一部が崩壊する被害が発生し、崩土中から多数の土器片が露出した。

台遺跡のある柴田町は宮城県南部の福島県近くに位置しており、どちらかというと福島県や関東などの影響が比較的色濃く見られる地域である。

後日、崩落斜面の踏査が行われ、2000点以上に及ぶ多くの土器等が採集された。その編年的な位置づけやその変遷については本論を通して述べていきたい。更に、本論では三十稻場式土器についても取り上げることにした。採集土器片をすべて整理したところ、わずか23点だけだが、三十稻場式土器に見られる特異な刺突が施された土器片が見られたのである。三十稻場式土器とは、田中耕作氏によると「新潟県を中心として東北南部から関東・中部高地、そして北陸という広い範囲での出土が知られている土器」（『信濃』第3次第37巻第4号1985）とされている。

それが柴田町では向畠遺跡からも検出されている（『柴田町の文化財第5集～遺跡と遺物～』1974、芳賀寿幸1974）。つまり、柴田町だけでも2遺跡から検出されているのである。それならば、県内の他市町村の遺跡からも検出例があるのでないだろうかと思い、改めて既存の報告書や市町村史等を調べてみた。すると、宮城県でも土器の出土数は僅かだが特異な刺突をもつ土器が出土している遺跡があることが分かったのである。

そこで、台遺跡や向畠遺跡でも出土しているこれらの土器が宮城県においてはどうな様相を呈しているのか、その実態はどうなのかを明らかにできないだろうかと思い、もう一つのテーマとした次第である。今回の報告では土器だけとした。報告の中心は

「台遺跡採集土器の時期的な変遷について他遺跡出土類似土器を参考に明らかにする」併せて、「宮城県内での三十稻場式土器の特徴を有する土器が出土している遺跡についてまとめてみる」ととした。研究に取り組んでおられる研究者皆様にとってささやかな参考資料の一つとなれば幸いである。

II 台遺跡の概要

1 歴史・調査研究のあゆみ

『郷土研究会会報』第5号「台遺跡」芳賀寿幸 柴田町郷土研究会（1972）

『柴田町の文化財第5集～遺跡と遺物～』（1974. 3）

『柴田町史』通史編I「第4編 柴田町の歴史」（1989）『柴田町史』資料編I 考古資料（1989）

（台遺跡の概要、考察等については会報第5号、文化財第5集、柴田町史等を参照いただきたい。）

2 繩文中期末葉から後期初頭にかけての土器の変遷と三十稻場式土器

2 遺跡の現状（2021年） 令和3年9月24日現在

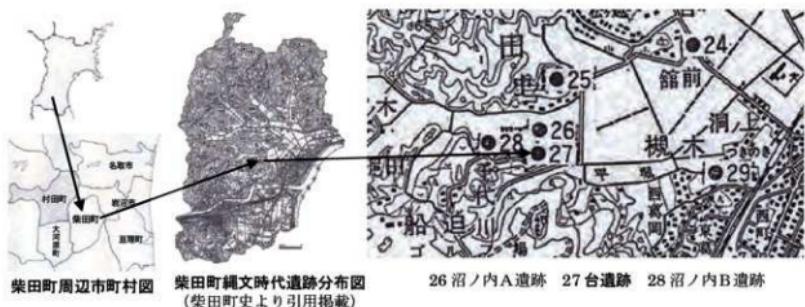


台遺跡近景（道路右側が台遺跡）

台風19号で崩れた崖面の現状

丘陵上は宅地と畑地となっている

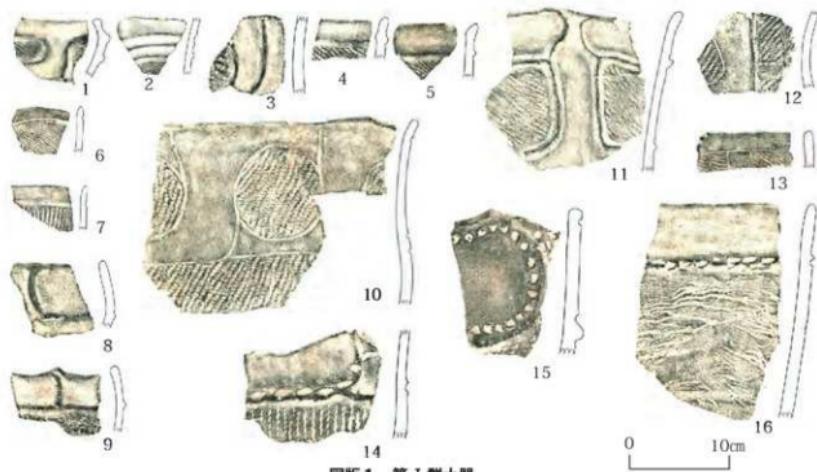
3 遺跡の立地・位置



III 台遺跡採集土器

1 第I群土器（図版1）

1～3は曲線的な磨消繩文帯をもつものである。口縁部から胴部にかけて比較的太い隆線により区画された曲線的な磨消繩文帯が施されている。4・5は1～3に見られた曲線的な磨消繩文帯が見られず、頸部に横位隆帯または隆沈線によって口縁部と胴部が区画されているものである。口縁部は無文帯となっており幅は比較的狭い。6・7は横位隆帯ではなく、沈線のみで口縁部と胴部が区画されているものである。8・9は口縁部に弧状の隆線文があるものである。9は波状線で波状部から弧状の隆線文が垂下している。10～13は隆沈線(10～12)または沈線(13)により方形に近い区画文が施されているものである。10は無文帯が継位または曲線の沈線によって区画されており、一部は頸部の横位沈線と接続している。無文帯間に円形に近い繩文帯が施されている。14～16は横長の連続刺突文が横位、または梢円形状に施されているものである。弧状の隆沈線に沿って施されているもの(14)、梢円状の隆沈線に沿って、内側にD字状の刺突文が連続して施されているもの(15)などがある。16は陵状の粗雑な隆線上に横長の刺突が横位に連続して施されている。

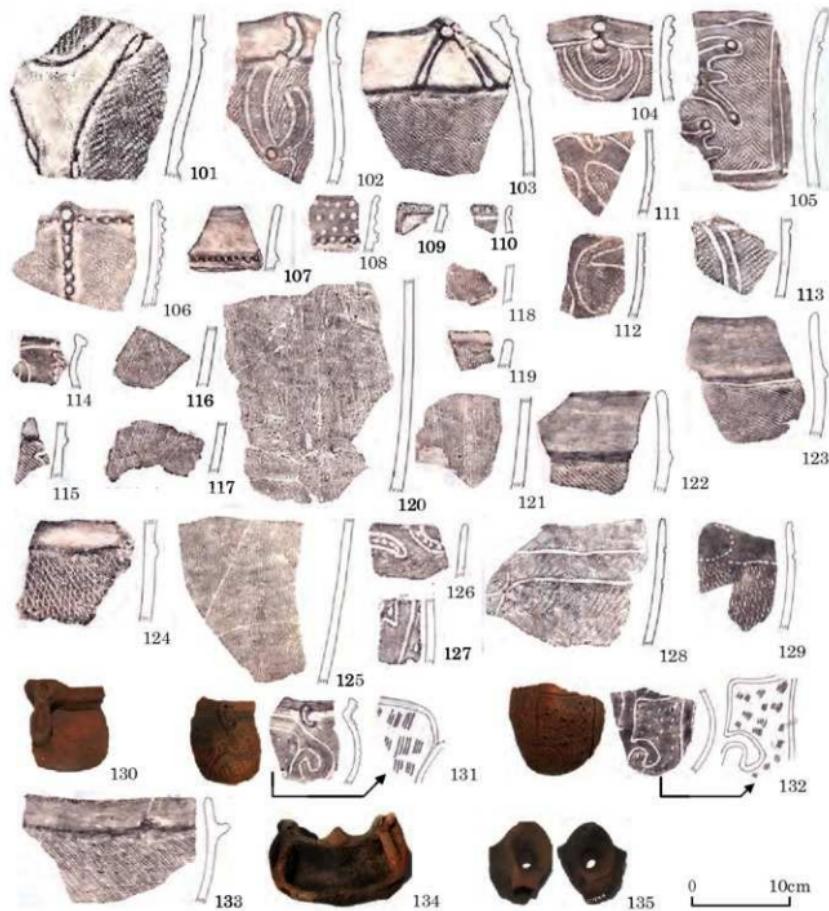


図版1 第I群土器

2 第II群土器(図版2)

101は底部から胴部にかけて外傾し、胴部上半で朝顔状に開く大型の深鉢と思われる。胴部に陵状の隆沈線が「Y」字状に施されており、その上に縦長の刺突文が施文されている。

102～105は小輪(円形のボタン状粘土塊を添付し、その中央に円い刺突を施してリング状の粘土塊を構成したもの)をもつものである。103は大型の深鉢で幅広い口縁部無文帯に波状部を頂点とする三角形状の隆沈線が施され、それぞれの角に小輪が見られるものである。沈線で描かれた幾何学的なモチーフの端部に小輪が施されているもの(105)などがある。106～108は隆帯上に刺突が施されているものである。口縁部から縦位の隆帯が垂下し横位に巡る隆帯と丁状に交わり、隆帯上に刺突が施されているもの(106)、刺突が刻目状に施されているもの(107)などがある。108は刺突が頸部を巡る隆帯上だけでなく、無文帯となっている口縁部にも同様な円形の刺突が見られる。109・110は円形の竹管等の断面を器面に垂直に押しつけた様な刺突が見られる。111～113は沈線による曲線的なモチーフが施されているものである。114・115は沈線による縦位のジグザク文が見られる。116・117は条線が施されているものである。118～121は櫛歯状の文様が施されているものである。4本単位のもの(118)、5本単位のもの(119)などが見られる。120は縦位の流水状のモチーフが他の曲線と絡み合いながら施文されている。121はやや深めの櫛歯文が縦位に施文されている。122・123は口縁部に幅の広い無文帯が見られるものである。頸部には隆帯が横位に巡っている。124は格子状に、125は直線状に撚糸文が施されている。126・127は曲線状の沈線で区画された内部に刺突状のモチーフが施されているものである。128は斜行繩文上に横位の平行沈線が施されており、左端で段違いになっている。129は口縁部に刺突が横位に施されているものである。

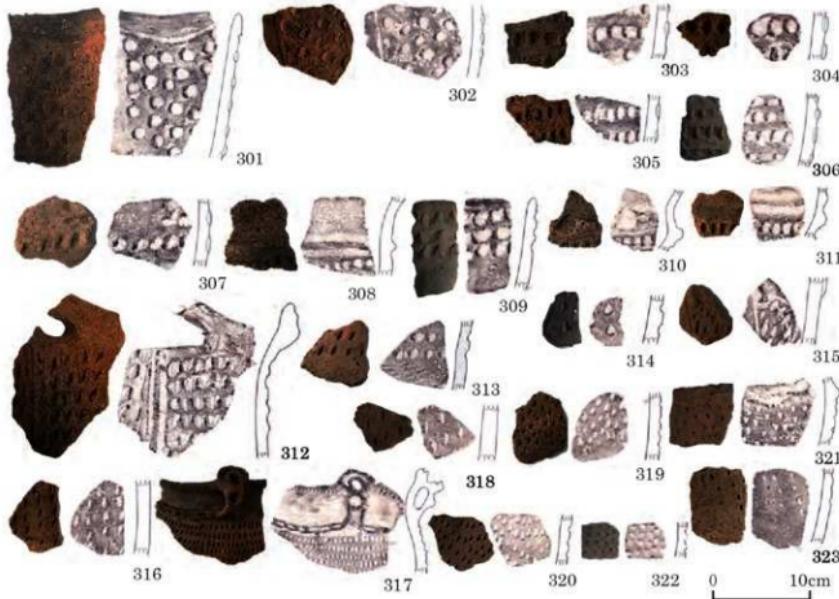


図版2 第II群土器

「入」状のモチーフのものと思われる。130は口縁部に8字状にねじれた突起をもつものである。131,132は胸部が球形状に膨らむ器形のもので、沈線による流动的な曲線文内部に、まるで短沈線のように見えるモチーフが描かれているものである。モチーフは数段に渡り施文されている。133は頸部に瘤状の突起を有するものである。134は口縁部が大きく外反し、棒状の橋状把手が施されている。135は孔を伴う突起がみられるものである。

3 第Ⅲ群土器 (図版3)

301～307は刺突により抉られた粘土が盛り上がる特徴をもつものである。301は破片全体に刺突が見られる。抉られた底部は滑らかで中央部が球形状に凹んでおり、左端に逆三日月状の盛り上がりが見られる。一つだけだが刺突底面中央に縦にまるで爪を立てたような痕跡が見られる。指を入れ、もう一つの指で摘むようにして盛り上がり部を作り出した可能性も考えられる。302も左側に粘土を抉り盛り上げたような痕跡がある。盛り上がり部の形状は半月状となっている。303は方形状に抉られており左端に棒状に近い盛り上がり部が見られる。304～306は小粘土粒を貼り付けたような盛り上がりが左端に見られる。貼り付けたものかどうかは確認できなかった。307は上から下方に向斜めに刺突がなされており左端の盛り上がりはそれほど高くない。308～311は刺突により粘土が抉られているが、左端の盛り上がりが見られないか、または殆どないものである。308～310は抉られた部分の形状が方形に近い。309は爪で粘土を抉ったような痕跡が底部に見られる。爪を使ったかどうかは確認できなかった。312は先が三角形状になった施工具のようなもので上方から下方に向かって付き刺したような刺突が見られる。その際出来たと思われる盛り上がりが左右に広がっている。313～323は棒状工具等による刺突が見られるもので粘土の盛り上がりが見られないものである。刺突は破片全面に施されているものが多い。317は胸部が球形状に内反し頸部で締り口縁部



図版3 第Ⅲ群土器

が外反する器形のものである。口唇部や頸部の隆帯上にも刺突が見られる。胸部には数段に渡り縦長の刺突が密に施文されている。口縁部には2つの盲孔で「8」字形のモチーフが施された橋状突起が見られる。318は爪形状になっている。319～323は長さの短い刺突となっている。

IV 台遺跡採集第Ⅰ・Ⅱ群土器の分析と考察

1 第Ⅰ群土器の分析とその編年（図版1）

中期末から後期初期、または初頭と思われるものを第Ⅰ群土器とした。本遺跡採集土器は小破片のため文様がどのように展開するのか不明なものが多い。文様の展開によっては編年的に違ってくるものもあると思われる。また、中期末、後期初頭の捉え方は研究者によって違っていたり、既存の報告書でも同一の特徴をもつ土器を中期末、あるいは後期初頭と異なった位置付けをしているものも見られる。従って第Ⅰ群土器については上記のような分類とさせていただいた。1～3は口縁部から胸部への文様構成の主体が磨消繩文帯となっており、その展開が曲線を保っているという特徴が見られる。南境貝塚（1969）、山田上ノ台（1987）、大梁川（1988）、菅生田（1982）遺跡からも類似のものが出土しており各報告書では大木10式に位置付けられている。中期末大木10式の古段階のものと考えられる。4・5は口縁部と胸部が区画されたものである。中村良幸氏は「口頸部に惹かれた直線的な沈線によって繩文帯の頭部が切り取られたような形」と表現している。（『観音堂遺跡』1986）

類似の土器は下ノ内遺跡（1990）第XI層や菅生田遺跡からも中期末葉の土器と併に出土している。中期末大木10式の新段階のものと考えられるが、文様の展開によっては後期初頭の可能性もある。8・9は口縁部に弧状の隆線文が見られるものである。類似の土器は菅生田遺跡からも出土している。菅生田遺跡の報告書では第Ⅱ群土器とされ後期前葉に位置付けられている。10～13は方形に近い区画文をもつものであるが、文様が全体ではどのように展開していくのかは不明である。10は無文帯間に円形に近い繩文帯が施されている。このようなモチーフのものは菅生田遺跡からも出土しており、菅生田遺跡では大木10式第Ⅱ段階の中でも比較的新しい時期のものとされている。11はLR rの繩文が施文されている。このような撚りは後期に出現することである。14～16は連続した刺突文が施されているものである。14のような隆帯に沿って横長の刺突文が施文されている土器は県内でも南境貝塚、大梁川、二屋敷（1984）、山田上ノ台遺跡などからも出土している。大梁川遺跡では第Ⅰ層期に分類され、大木10式後半期とされている。二屋敷遺跡では中期の土器として、山田上ノ台遺跡では第X群第9類として大木10式第Ⅲ段階に位置付けられている。しかし、後期に位置付けられ編年的には門前式より一つ前のものではないかとの指摘もある。菅生田遺跡では第Ⅱ群土器として後期前葉に位置付けられている。16については隆帯上に刺突文が施されており後期に近いものと思われる。このように編年的位置付けの見解が中期、後期と分かれているものもある。これらを含めて第Ⅰ群土器とさせていただいた。

2 第Ⅱ群土器の分析とその編年（図版2）

後期初頭と思われるものを第Ⅱ群土器とした。101のような「Y」字状、陵線上に縦長の刺突文が施されたものは六反田（1987）、二屋敷、下ノ内遺跡からも出土しており、門前式に位置付けられ後

期初頭とされている。『小名浜』(渡辺一雄・馬目順一編 1968)によると、出土土器について「全出土土器の9割以上が縄文後期土器だ」とし出土土器を文様上の要素から「第1類「隆起線文」、第2類「磨消縄文」、第3類「沈線文」、第4類「櫛齒条線文」等に分類している。台遺跡第II群土器としたものはこれらの文様要素と類似しているものが多く見られる。台遺跡の102~105は『小名浜』での第1類土器の文様表記を引用すれば「頸部を水平に一周する隆線文」「口縁部文様帯と頸部文様帯に区分される」「口縁部文様帯は口縁の頂点と頸部隆線文とを結んでC字状の隆起線が付され、隆起線内側には沈線が施されるため、あたかも2本の隆起線の感を抱かしめる」「それら隆起線の頂点、起点、終点などの要所には小輪(円形のボタン状粘土塊を添付し、その中央に円い刺突を施してリング状の粘土塊を構成したもの)を配している」「隆起線以外のものは無文帯のまま残される」など、ほぼ『小名浜』の第1類土器と共通する文様要素を有するものである。103は菅生田、二屋敷、山田上ノ台遺跡など多くの遺跡で全く同じモチーフの土器が出土しており、菅生田遺跡では第II群土器として、山田上ノ台遺跡では第XI群第5類として、いずれの報告書でも後期初頭に位置付けられている。104・105のように「文様内に凹部(盲孔)が特徴的に施文されたもの」について後藤勝彦氏は『仙台湾湾岸の基礎的研究II—南境貝塚—』(2013)の中で「宮戸I b式に極めて近い土器群である」とされている。台遺跡106~108は隆帯上に刺突が施されているものであるが、同様の文様要素は南境貝塚、福島県綱取C地点貝塚(金子浩昌・和田哲 1968)、いわき市大畑遺跡(小林行雄監修・馬目順一編 1975)からも出土しており後期初頭・前半に位置付けられている。109・110は類似の土器を確認できなかった。111~113は沈線による曲線的なモチーフが施されているものであるが、同様の文様要素は『小名浜』での第2類土器として、また綱取貝塚第四地点からも出土しており堀之内I式として紹介(馬目)されている。116・117は条線が施されているものである。菅生田遺跡でも類似の土器が出土しており後期初頭に位置付けられている。118~121は櫛齒状の文様が施されているものである。類似の土器は二屋敷遺跡からも出土しており第II群土器として後期前葉の土器に位置付けている。また、田中耕作氏によると、条線文は称名寺I・II式で盛んに用いられている(田中耕作『信濃』第3次第37巻第4号)とのことである。122・123は口縁部に幅の広い無文帯が見られるものである。郡山市柳橋遺跡からも類似の土器が出土しておりB-1-1類に分類され、綱取I式に位置付けられている。124は後期初頭の土器にしばしばみられるような綱代状燃系文が、125は直線状の燃系文が見られる。126・127は福島県いわき市愛谷遺跡^{あいや}からも類似の土器が出土しており、綱取I式に位置付けられている。128は二屋敷遺跡でも類似の土器が出土している。後期初頭よりも新しい時期のものかもしれない。129は刺突により「入」の字状のモチーフが描かれているものであり、後期初頭の土器と伴に出土している遺跡が見られる。131・132はまるで短沈線のように見えるモチーフをもつ土器である。類似の土器は綱取C地点貝塚から第III群第3類土器b種(図1)として出土している。(『小名浜』所収)。同報告



図1 綱取C地点貝塚出土土器

書で金子浩昌・和田哲氏は「無文地に沈線文を施し、沈線間に刺突を加えるなどした土器の文様モチーフは称名寺Ⅰ式のそれと類似している」と述べている。称名寺貝塚からも類似の土器が出土しているが、同貝塚の整理に携わった担当者によると「このモチーフは櫛歯のようなものを使用したもので、一本ずつ引かれたものではない」とのことであった。台遺跡の131・132を見ていただいたが「称名寺出土と同じモチーフで称名寺Ⅱ式に見られるモチーフの一つだ」とのことであった。133のように脇部中位に瘤状の突起が見られるものは、二屋敷遺跡からも類似の土器が出土しており後期初頭に位置付けられている。134・135は突起、把手、貫通孔等をもつものだが後期初頭のものと思われる。

V 台遺跡採集第Ⅲ群土器の分析と考察（図版3）

1 特異な刺突について

台遺跡からは三十稻場式に見られる特異な刺突文が施されている土器が採集されている。刺突文は多くの時期の土器に見られるが、なぜ、刺突を一見しただけで三十稻場式だと識別できるのだろうか。

石坂圭介氏は「三十稻場式土器」の解説文の中で、「特殊な刺突文」として花弁状刺突文を取り上げて「この花弁状刺突文は非常に特徴的であり、遠地で発見されても同定が比較的容易である」と述べている。この花弁状刺突文について、田中耕作氏は「所謂『三十稻場式土器』の成立について」（『信濃』第3次第37巻第4号）の文中で刺突文を6つに分類しており、その一つとして花弁状刺突文を取り上げている。その分類は以下の通りである。

分類記号	刺突文名	主な特徴
a	花弁状・魚鱗形	竹管の背面を主に横方向から刺突する。抉(えぐ)れた粘土が盛り上がる特徴となる
b	突瘤文	小粘土粒を全面に貼りつけたもの。半蔵竹管で器面を盛り上げて表現したもの
c	引き抜いたような文様	半蔵又は多蔵の竹管で引き抜いたような文様
d	所謂爪形文	
e	垂直刺突文	円形竹管や、棒状・ヘラ状工具を器面に対し垂直に刺突するもの
f	押し引文	施文具の背を土器に押し引き、三角状を呈するもの

この花弁状刺突文（鱗状刺突文）について高木晃氏は「土器の移動と交流Ⅱ—東北地方出土の三十稻場式系土器について—」（第13回岩手考古学会研究大会 1994年発表）の文中で「器面をえぐるようすに突きさし、盛り上がった粘土を指で押さえる手法は三十稻場式に特徴的なものとされている。大木式でも刺突文は一般的だが、花弁状刺突文の手法は中期後葉には用いられない。従来、東北北半ではこの花弁状刺突文を持つ土器を三十稻場式として捉えてきた。」と述べている。

さて、具体的にどのような刺突文がどの名称に該当するのかは、必ずしも明確ではないが、菊池寛子氏は「三十稻場式類似土器の施文方法について」（『岩手考古学』第16号 2004）で「北上川中流域の土器では」としながら6遺跡から出土した土器について「刺突の表現と施文具」として表にまとめ、具体的にどのような文様であるかを示している。それを、まとめると以下の様になる。

分類		主な特徴
刺突	1類 : 棒状工具等による刺突で粘土の隆起がみられないもの	半截竹管による右から左方向の刺突、単純な爪形文などもある。
	2類 a : 工具による持ち上がりにより粘土が自然に隆起したもの	2類 a と b は技法は変わらないが、粘土粒の付き方が若干違っているため1つにまとめることができないものである。
	2類 b : 2類 a と同様だが粘土粒がより大き且明瞭なもの	2類 b の粘土粒は土器周辺が土器本体と明確に区別されるものが多く、それは工具の持ち上げだけでは作り出しにくいものである。
刺突 + 指による二次的動作	3類 : 刺突の後に指によると思われる二次的動作が加わるもの	工具による刺突と考えられるが、その後に爪形文が観察されるものもある。粘土粒にはしづが出来ているものもあり、複数回の粘土の寄せ集めが行われたものと思われる。指によるつまみの可能性があるものもある。
指によるつまみ	4類 : 指によるつまみと思われるもの	土器への工具のあたりが滑らかであることから指による施文と考えられる。

北上川中流域出土土器の施文具と技法による分類(菊池寛子『岩手考古学』第16号より一部のみ引用掲載)

また、特徴的な刺突文の名称例として、以下の3点について明記している。



2 台遺跡での特異な刺突をもつ土器について

以上の分類を参考にして台遺跡で採集された刺突文を分類してみると、以下のようなになる。

分類	土器番号
花弁状・魚鱗形か?	301 302
刺突の後に指または何らかの二次的動作を加えて盛り上がりが見られるもの	303 304 305 306 307 抉られて盛り上がったものなのか、小粘土粒による貼り瘤なのか、左右から指でつまみあげたものなのかは識別が難しい。
盛り上がりが明確でないもの(わずかに盛り上がりが見られるものも見られる)	308 309 310 311
左右に盛り上がりが見られるもの	312
爪形文	313~323
棒状工具等による刺突で粘土の隆起がみられないもの	施文具の幅、長さ、深さ、施文の方向などが同一土器でも必ずしも同じでないものも見られる。

以上、田中耕作氏、菊池寛子氏の分類を参考にしながら、台遺跡検出の刺突文について分類してみた。刺突の違いについては田中耕作氏が「これらの施文の違いによって地域差を論じることは困難なようだ。しかし、時間差という点では、花弁状・魚鱗形が古い様相と考えられる。」(『信濃』第3次第37卷第4号)と述べている。従って今回の分類によって何かが解明できるということにはならないが、このような資料の蓄積が新たな解明につながっていけばと思っている。三十稻場式土器は新潟県を中心として東北南部、関東、中部、北陸と広い範囲で出土している。しかし、田中耕作氏は『信濃』

第3次第37卷第4号で「土器構成要素が土着し集団に受け入れられている地域と搬入もしくは模傍による土器が僅かに出土するだけの地域は、自ら性格が異なるものであり区別して扱わなければならない」と述べている。このご指摘からすれば本遺跡は田中氏の述べている三十稻場式の「外圏」ということになるであろう。

次に三十稻場式はいつ出現し、いつ終わりを迎えたのかを論じてみたい。

田中氏は三十稻場式を古段階、新段階、南三十稻場式（1989）とした変遷案を示しているが（『縄文時代』10 1999）三十稻場式古段階は称名寺I式新段階及びII式に併行させている。また、本間宏氏は会津や中通り地方での例示を基に、その下限を綱取I式末期から綱取II式古段階としている。終末については『新潟県の考古学』III（2019）の編年表によると、三十稻場式（新）が堀之内I式（古）（中）と併行関係とされている。田中氏は（『信濃』第3次第37卷第4号）で三十稻場式の終末について「掘之内II式まで残るであろう」と述べている。また、「関東では三十稻場式と共に存する形で称名寺II式が出土する例が多い」ことも紹介している。台遺跡では採集土器のため、どの編年の土器と共伴するのかは論じることはできないが、何れかの日に層位的に明らかになる日が来ることを念じたい。最後になるが、現在調べた限りにおける県内の三十稻場式土器の特質を有する土器が出土した遺跡を紹介したい。県内の収蔵庫にまだまだ眠っているであろう資料が公表され、更に詳細な実態が明らかになることを願っている。

3 県内遺跡での特異な刺突をもつ土器について

（1）特異な刺突をもつ土器出土遺跡名一覧

地図番号	遺跡名	市町村名	図版-土器番号	地図番号	遺跡名	市町村名	図版-土器番号
★1	台	柴田町	図版 3	1 0	西裏B	藏王町	4 - 15
2	向畠	柴田町	4 - 1	1 1	大梁川	七ヶ宿町	4 - 16
3	六反田	仙台市	4 - 2、3	1 2	中ノ内 C	川崎町	4 - 17
4	山田上ノ台	仙台市	4 - 4、5	1 3	東足立	村田町	4 - 18
5	下ノ内	仙台市	4 - 6	1 4	南境貝塚	石巻市	4 - 19
6	農学寮跡	仙台市	4 - 7	1 5	屋敷浜貝塚	石巻市	4 - 20
7	菅生田	白石市	4 - 8、9	1 6	金取	大和町	4 - 21
8	一本木	藏王町	4 - 10、11	1 7	青木畠	旧一迫町	4 - 22、23
9	二屋敷	藏王町	4 - 12~14	1 8	三本松	加美町	4 - 24

VI おわりに

台遺跡採集土器については「分析と考察」で述べた通りである。ここでは、三十稻場式土器の要素をもつ土器について述べさせていただく。二年前、柴田町「しばたの郷土館」展示室で見たほぼ完形に近い、ある土器との出会いが始まりだった。向畠遺跡から出土したその土器（図版4-1）は器面を覆い尽くすように数段に渡り特異な刺突が施されていた。そんな折、2019年の台風19号の被害により崩落した斜面等より採集された2000点を超える土器を見る機会を得た。全ての土器を調べた所、わずか23点ではあるが、向畠遺跡の出土土器と同様な特異な刺突を有する土器が混在している

(2) 特異な刺突をもつ土器出土遺跡地図



圖2

22 青木烟

(縮尺 不同)

24 三本松

(3) 宮城県内から出土している三十稻場式の要素を持つとみられる土器



図版4 宮城県内の三十稻場式土器の要素をもつとみられる土器

ことが分かった。柴田町だけで少なくとも向畠、台の2遺跡で特異な刺突を有する土器が確認できた。そうならば、他の市町村でも出土例があるのではないかと思い、既存の調査報告書、県内の市町村史等を調べてみた。すると、同様のモチーフをもつ遺跡が複数あることが分かった。(図2) しかし、(あえて特異な刺突をもつだけで「三十稻場」と表記しなかつただけなのかも知れないが) 既存の報告書等を熟読しても三十稻場の文字が記述されているものは殆どなかった。以上が三十稻場式土器の要素をもつ土器との出会いと経緯である。そして、このようなことから作成したものが本論である。本論では特異な刺突のみに着目して分析を行ったが、三十稻場式土器の要素はそればかりでないことは勿論のことである。「く」の字状に外反する口縁部無文帯に、四単位の橋状把手や貼付文を配した深鉢形土器（田中耕作）など、刺突以外にも多くの要素がある。田中耕作氏は「外圈で確認される三十稻場式土器はこの橋状取手を含めた口縁部と、胴部の刺突文が決め手の主要な要素と言える」と述べている。次回は刺突以外の要素等にも着目したものをまとめてみたいと思っている。

末文に当たり私事で恐縮だが、今回、台遺跡をまとめるために読んだ柴田町の歴史関係の文献には同じ考古学の仲間であった「芳賀寿幸」の名前が所々に書かれてあった。彼の名前を見る度に、もし、氏が存命ならきっと私など及びもつかないすばらしい台遺跡の論をまとめたことだろうと思えてならなかった。柴田町に生まれ、柴田町の縄文研究を献身的に推進されていた芳賀氏の志を少しでもこの稿に込めることができたら幸いと思えた。最後に多くの人の助言と卓越した多くの論文に触れさせていただいたことに感謝申し上げたい。

【引用参考文献一覧】

- 1 『竹ノ内遺跡』(1990) 2 『山上上ノ台遺跡』(1987) 3 『六反田遺跡』(1981) 4 『下ノ内遺跡』(1982) 5 『菅生田遺跡』(1982) 6 『大梁川・小梁川遺跡』(1988) 7 『小梁川遺跡』(1986) 8 『小梁川遺跡』(1987) 9 丹羽茂『大木式土器』『縄文文化の研究』4 (1981) 10 本間宏『大木10式土器の考え方』『しのぶ考古』10 (1994)
- 11 本間宏『南境式・綱取式』『總覽縄文土器』(2008) 12 森幸彦『大木9、10式土器』『總覽縄文土器』(2008)
- 13 芳賀寿幸『台遺跡』『郷土研究会会報』第5号 (1972) 14 『柴田町の文化財第5集～遺跡と遺物～』(1974)
- 15 芳賀寿幸『向畠遺跡調査概報』『郷土研究会会報』第7号 (1974) 16 『原生・古代史』『柴田町史通史編I』(1989) 17 『柴田町史』考古資料編 (1983) 18 後藤勝彦『仙台湾沿岸貝塚の基礎的研究II－南境貝塚－』(2013)
- 19 後藤勝彦『南境貝塚調査の層位の成果III－5・6・7・8・9』『宮城史学』34号 (2015) 20 相原淳一『東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年』21 相原淳一『阿武隈川下流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説』22 小林行雄監修・馬目順一編集『大畑貝塚』(1975) 23 『小名浜』(1968) 福島県いわき市教育委員会磐城出張所 24 金子浩昌・和田哲『綱取C地点貝塚の発掘』『小名浜』(1968) 25 『綱取貝塚第四地点発見の堀之内I式土器の考察』『小名浜』(1968) 26 馬目順一『いわゆる綱取貝塚C地点の土器について』(1977) 27 馬目順一『各地の堀之内土器とその変遷 南東北』『シンポジウム堀之内式土器資料集』(1982) 28 稲村晃嗣『門前式土器』『總覽縄文土器』29 熊谷常正『門前式土器の検討』(1986)
- 30 及川海他『門前貝塚』(1974) 31 『南境貝塚』『矢本町史』32 『二屋敷遺跡』(1984) 33 『北野遺跡II』(2005)
- 34 『長削遺跡』(2011) 35 『元屋敷遺跡』(1995) 36 田中耕作『所謂「三十稻場式土器」の成立について』『信濃』第3次第37卷第4号 (1985) 37 田中耕作『三十稻場式土器研究の現状と課題』『新潟考古学談話会会報』第5号 (1990) 38 田中耕作『三十稻場式土器様式』『縄文土器大観』第4巻 (1989) 小学館 39 駒形敏朗他『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』40 高木見『土器の移動と交流II－東北地方出土の三十稻場式系統土器について－』(1994) 岩手考古学会 41 馬高繩文館『解説シリーズNo.1 火焰土器と馬高・三十稻場遺跡』長岡市教育委員会 42 新潟県考古学会設立30周年記念誌『新潟県の考古学III』(2019) 新潟県考古学会 43 菊池寛子『三十稻場式類似土器の施文方法について』『岩手考古学』第16号 (2004) 岩手考古学会 44 『農学寮跡遺跡』(1981) 45 『青木畠遺跡』(1982) 46 『東足立遺跡』47 『三本松遺跡』(2011) 48 『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡』(1987) 49 『一本松』『白石市史』別巻考古資料篇 50 『金取遺跡』(2004) 51 『柳橋遺跡』(2002)

宮城県白石市小原産玉髓の産状とその利用

—宮城県蔵王町大久保遺跡における縄文時代後期の事例—

鈴木 雅（蔵王町教育委員会）

1.はじめに

白石市西部の山地を流れる白石川中流域の小原渓谷では、安山岩の岩体中に脈岩として良質な玉髓が産出する（須田 2000 ほか）。これらは先史時代に石器石材として利用された可能性が考えられるが、これまで具体的な利用状況は明らかになっていなかった。近年、小原渓谷から約 12km 下流の白石川に面した河岸段丘面上に立地する縄文時代後期前葉の蔵王町大久保遺跡で玉髓製の石器がまとめて発見され、小原産玉髓を利用した石器製作活動の痕跡である可能性が考えられた。本稿では、はじめに宮城県南部の蔵王東麓地域の石器石材環境を概観した上で、白石川の小原渓谷とその下流の河床礫調査で確認した玉髓の産状と分布、発見された石器から推定される大久保遺跡における石器製作活動について述べ、蔵王東麓地域における在地石材利用についての予察としたい。

2. 蔵王東麓地域の石器石材環境

蔵王東麓地域には、黒曜石・ガラス質流紋岩・無斑品質安山岩・玉髓質珪化木・玉髓・瑪瑙・碧玉・石英岩・珪化凝灰岩・緑色凝灰岩・珪質頁岩・頁岩・珪質シルト岩・シルト岩などの石器石材が分布する。これらの在地石材の分布状況や原石の特徴については別稿（鈴木 2021・印刷中）に詳しいので、ここでは石器石材としての適性との関係を中心の大まかな傾向を確認しておく。なお、便宜的に原石の粒径 15cm 以下を小型、15～30cm を中型、30cm 以上を大型と記載する。

この地域の特徴として、複数の黒曜石產出地（秋保・川崎・蔵王・白石）の存在が挙げられる（佐々木 2013, 佐々木・鈴木 2016 ほか）。しかし、秋保産黒曜石の岩体を除けばいずれも火碎流堆積物を主とする第三紀層に包含されるものであり、產出域は広いが分布は散漫で得られる原石のサイズも総じて小型である。岩質は結晶質のものが多いが、無斑品質の川崎産黒曜石は良質で精緻な加工が可能である。

ガラス質流紋岩は黒曜石產出地を中心とした比較的広範囲で產出し、中型～大型の原石が比較的安定的に見られる。基本的に斑晶と流理構造を認めるもので、名取川流域では赤紫色、白石川流域では青灰色を呈するものが多い。剥離性は比較的良好だが岩質はやや脆い。転疊として流下する過程で内部に亀裂を生じているものも多いため剥離のコントロールは難しく、両面加工には適さない。緻密・無斑品質の原石は小型で量も少ないが、剥離性は良好で精緻な加工が可能である。

無斑品質安山岩は良質のものが前川流域に分布する。剥離性が良好で岩質も脆くなく、石目を利用して平坦剥離に適する。今のところ產出地が不明で小型の原石しか確認できていないが、大型の原石が得られれば打製石斧など両面加工石器の製作も可能な利用価値の高い石器石材と言える。

玉髓質珪化木・玉髓・瑪瑙・碧玉は新川流域の村田町小泉に比較的まとめて分布する（大場 2004 ほか）。大型の原石も得られるが、部位によって岩質が異なり不純物や空隙を含むことがある。良質の

2 宮城県白石市小原産玉髓の産状とその利用

原石であれば両面加工にも適し、精緻な加工も可能である。なお、碧玉は比較的硬質のものがが多く剥離性はやや劣る。白石川の小原渓谷では玉髓が産出し、松川との合流点付近まで分布する。原石は小型のものが多いが、稀に中型のものも見られ、非常に良質で剥離性が良く精緻な加工に適する。こうしたシリカ鉱物は上述の二つの産地（小泉・小原）以外でも見られるが、分布は極めて散漫である。

珪質頁岩はやや希少だが児捨川・前川・太郎川に良質のものが分布する。色調は灰色・黒色・黄白色があり、剥離性に優れている。中型の原石が得られるので両面加工にも適し、精緻な加工も可能である。珪質頁岩は山形県域内陸部の出羽山地に大規模な産地があり（秦 2003, 吉川 2020 ほか）、宮城県側では搬入石材として一括されることが多いが、本地域においては在地石材として調達されたものが一定程度の比率を占めた可能性がある。頁岩もやや希少だが太郎川・高木川・黒沢川・荒川・児捨川・入山沢川などに比較的広く分布する。中型の原石が得られ、均質緻密で両面加工に適するものがある。

以上、蔵王東麓地域の石器石材について概観したが、この中では流紋岩が最も分布が広範かつ量的に安定した石材と言える。また、珪化凝灰岩、緑色凝灰岩、珪質シルト岩、シルト岩なども広範に分布し、量的にもある程度安定している。しかし、流紋岩を含めて剥離特性の面で両面加工や押圧剥離などの精緻な加工に適したもののはあまり多くない。これに対して小原産玉髓と小泉産の玉髓質珪化木・玉髓・瑪瑙・碧玉（以下、小泉産玉髓と総称）は極めて良質かつ安定的に採取が可能な石材と言える。

3. 小原産玉髓の産状と分布（図1）

宮城・山形県境の二井宿山地から蔵王連峰南麓を七ヶ宿街道沿いに東流した白石川は、七ヶ宿ダム下流で流路を北東に転じて鉢森山と花房山の間を開析し、小原渓谷あるいは碧玉渓と通称される深いV字状の渓谷をなす。両岸は主に鉢森山・安山岩の岩体からなる急峻な露頭であり、この岩体中に脈岩として玉髓が形成されている。蝦夷倉川との合流点付近では、安山岩の巨礫から分離した粒径3～10cm程度の板状の玉髓が見られる。乳白色半透明を呈し、不純物が少なく均質なものである。

白石盆地へ流下した白石川の河床礫中には、小原渓谷の脈岩由来の玉髓が淘汰されて粒径3～5cm程度の亜円礫～円礫状となったものが分布する。また、稀に粒径10～15cm程度でノジュール状を呈する玉髓が見られる。これらの玉髓の分布は松川との合流点付近まで確認できるが、これ以東では分布の密度が大幅に低下する。蔵王火山から流下する松川が供給する多量の土砂の影響であろう。

以上のような産状と分布から、原産地となる小原渓谷では河床礫中に見られる玉髓は比較的に少なく、硬い安山岩の岩石中からの採取は容易でない。これに対して白石盆地内の河床では複数回の調査においても安定的に採集することができ、転礫による内部の亀裂なども認められないことから質・量ともに安定的に石器石材としての利用が可能と考えられる。

4. 大久保遺跡における石器製作活動

（1）遺跡と調査の概要

大久保遺跡は蔵王町南東部に位置し、松川との合流点から約2km下流の白石川左岸に面した丘陵頂部平坦地に立地する（図1）。白石川の河床面とは比高約100mで、地形分類図では遠刈田段丘面に

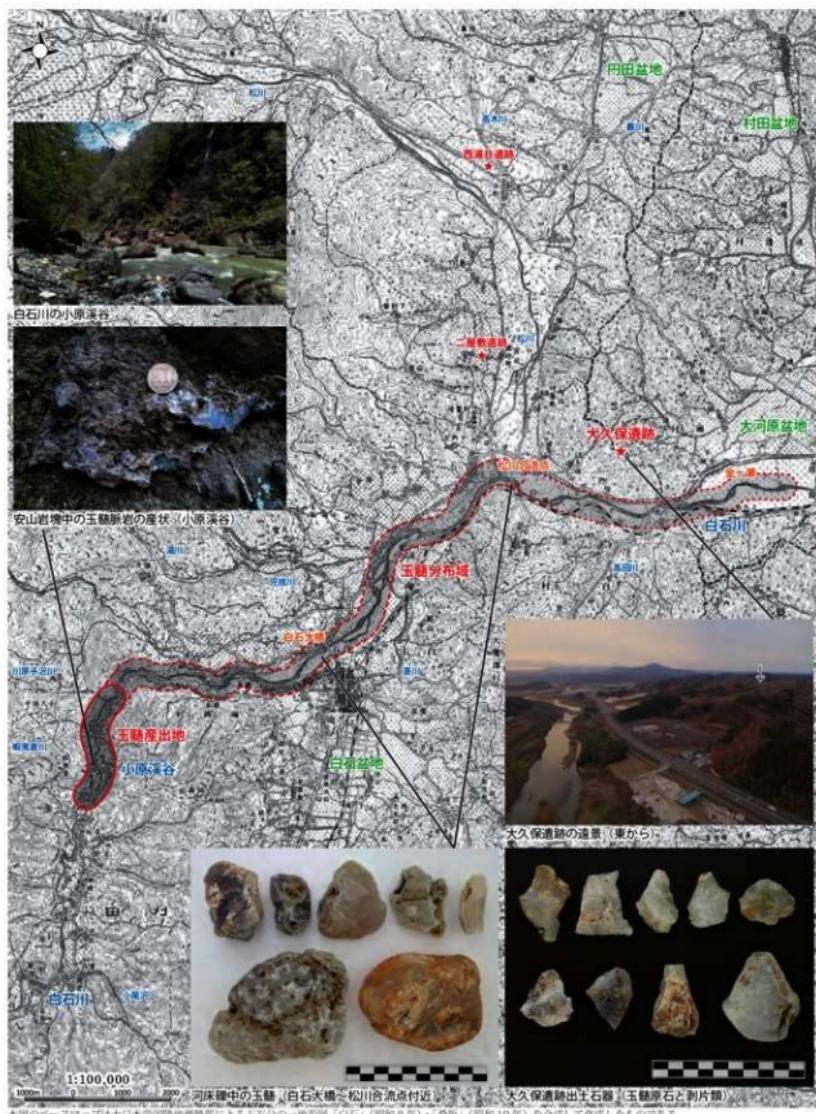


図1 小原産玉髓の分布と大久保遺跡

対比されている。2018・2019年に太陽光発電事業計画に伴って遺跡の表面調査と事業計画範囲の確認調査を実施した。調査対象面積は4,559m²、トレンチ掘削面積は701m²（調査対象面積の15.4%）である。調査の結果、遺跡範囲東部の丘陵頂部平坦面から南斜面にかけて比較的まとまった遺構の分布を確認した。確認した遺構は竪穴住居跡5軒のほか土坑・柱穴多数である。内容確認のため土坑8基について一部掘り下げを実施したところ、4基がプラスコ状土坑で貯蔵穴と考えられた。遺物は縄文土器、土製品、石器、礫石器が出土し、縄文土器には縄文時代後期前葉の綱取II式に位置づけられるものがある。遺構の分布を確認した範囲は盛土保存ないしは保存区として工事区域から除外して現状保存が図られている。また、確認調査に前後して実施した周辺の表面調査の結果、確認調査地点西側の畠地で濃密な遺物の表面散布を確認した。採集した遺物は縄文土器、石器、礫石器があるが、玉髓製石器が特に多く、多量の剥片、碎片のほか小型の敲石も見られ石器製作活動の痕跡と考えられた。

（2）石器製作活動の内容

上述の調査で得られた資料から本遺跡における石器製作活動について若干の検討を加える。資料の性格上、層位的根拠に乏しく一括性についての評価は留保せざるを得ないが、上述した縄文土器の編年的位置付けによれば、本遺跡の活動痕跡は概ね縄文時代後期前葉に収まるものと考えられる。

現在までに得られた石器546点の器種・石材構成を表1に示す。器種構成は製品類21.4%、石核・剥片類78.6%からなり、製品類は石鏃と楔形石器を主体に少数の尖頭器、磨製石斧、石錐などがある。石鏃と楔形石器に特化した器種構成であり、石錐には未製品を含む。石材構成は玉髓35.0%を含むシリカ鉱物48.2%、珪質頁岩29.1%を含む泥岩類32.2%を主体に、黒曜石などの流紋岩類8.2%、珪化凝灰岩などの凝灰岩類7.5%などからなり、玉髓が最も多く利用されている。黒曜石は漆黒で結晶質のものと黒色透明で非晶質のものとが見られ、近隣の原産地では前者が藏王産、後者が川崎産の特

器種類	シリカ鉱物								泥岩類			流紋岩類			凝灰岩類			その他	総計	
	玉 髓	磨 玉 (自) 玉 (金)	碧 玉 (金) 玉 (銀)	碧 玉 (赤) 玉 (銀)	碧 玉 (赤) 玉 (金)	碧 玉 (赤) 玉 (銀)	石 英岩	珪 質 頁岩	真 岩	碧 質 シート岩	黒 曜 石	ガ ラス質 後 成岩	珪 化 凝 灰 岩	綠 色 凝 灰 岩	黑 色 凝 灰 岩					
石鏃	3				1				12			1				0	17	3.1%		
石鏃(未製品)	1	1														1	3	0.5%		
尖頭器															1	0	1	0.2%		
磨製石斧																1	1	0.2%		
石錐	1								3							0	4	0.7%		
楔形石器	13		2	1	1	1	5	1	1						1	1	26	4.8%		
不定形石器									1						1	1	2	0.4%		
二次加工ある剝片	11	2	2	2	1	2	2	26	2	3	1	3	1	4	0	62	11.4%			
難細剝離ある剝片								1							0	1	0.2%			
石 剝 片 類	154	5	8	13	3	4	4	110	3	5	8	27	12	7	13	12	388	71.1%		
石 核 ・ 剥 片 類		1			1					1					1	4	0.7%		429	78.6%
石核	6		1	2	3	8	1	1	1		4	1	1	1	3	33	6.0%			
原石	1							2							1	4	0.7%			
	191	7	11	18	5	9	15	7	159	7	10	14	31	15	12	14				
総計	35.0%	1.3%	2.0%	3.3%	0.9%	1.6%	2.7%	1.3%	29.1%	1.3%	1.8%	2.6%	5.7%	2.7%	2.2%	2.6%	21			
									263		176	45		41					546	
									48.2%		32.2%	8.2%		7.5%	3.8%					

表1 大久保遺跡の石器組成

微に近似する。磨製石斧は小型品の基部破片（図3-12）であるが、北陸産とされる透閃石岩製の可能性がある。このほか、石器製作具と考えられる敲石が9点ある（図4-3～9）。

玉髓製石器に見られる原石の特徴は、本遺跡近傍の白石川河床で得られるものと概ね一致する（図1）。原石の表皮を残す資料はいずれも円磨作用を受けた河床礫の特徴を示し、原石またはその形状を残す資料では粒径3～6cm程度の小型の亜円礫～円礫が素材となっている。また、これより大きな原石の利用を示唆する分割片も見られる。

石核（図3-13～15、4-1・2）は長軸2～5cm程度の小型のもので、打面転移を頻繁に行って多面体状を呈した多打面石核を主体とする。剥片は長軸2.5～5cm程度のものまでが剥離されている。また、少数の両極石核と両極剥片も見られる。

敲石は細長い梢円形ないしは棒状の円礫を素材とする。比較的硬質の安山岩・ディサイト製で重量400～500g程度（図4-9）、200～300g程度（図4-6～8）、100g程度（図4-5）、やや軟質の緑色凝灰岩製で80g程度（図4-3・4）のものがある。これらは剥片剥離作業の対象となる石材の剥離性や大きさ・形状と作業工程などに応じた使い分けを示すと考えられる。いずれも長軸の端部に使用痕跡としての敲打面を形成するが、長軸に直交するものと斜行するものが見られる。長軸に直交する敲打面は、長軸を垂直に保持して真下に振り下ろす動作によるものと推定され、台石上での両極打撃との関連が考えられる。長軸に斜行する敲打面は、長軸を横位に保持して肘を支点にして弧を描くよう振り下ろす動作によるものと推定され、一般的な剥片剥離作業での使用によるものと考えられる。

以上のように、本遺跡は上流の小原渓谷から流下し淘汰の進んだ玉髓を遺跡近傍の白石川河床から採取して石器製作活動を行なった原産地遺跡と考えられる。玉髓を素材として製作された製品は石鏃（図2-1・3～5）と楔形石器（図3-5～7）であり、小型器種に特化した石材利用が窺われる。石鏃は一般に小型・薄手の製品で、全面に押圧による二次加工を加えることから製作時の事故剥離による破損を生じやすく、使用時には鋭利な尖端部の折損を生じやすい。楔形石器は上下からの強い衝撃を繰り返し受け、損耗の激しい製品である。シリカ鉱物のうち玉髓、瑪瑙、碧玉は潜晶質石英に分類され、極めて微細な石英の針状結晶の集合からなる複雑な纖維状組織で、緻密かつ強靭な物理的特性を持つ

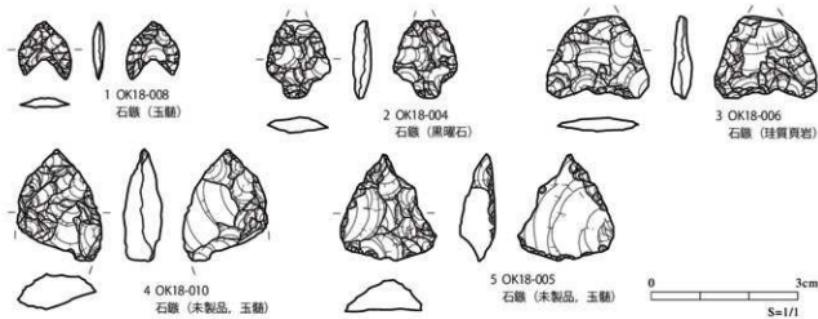


図2 大久保遺跡出土石器（1）

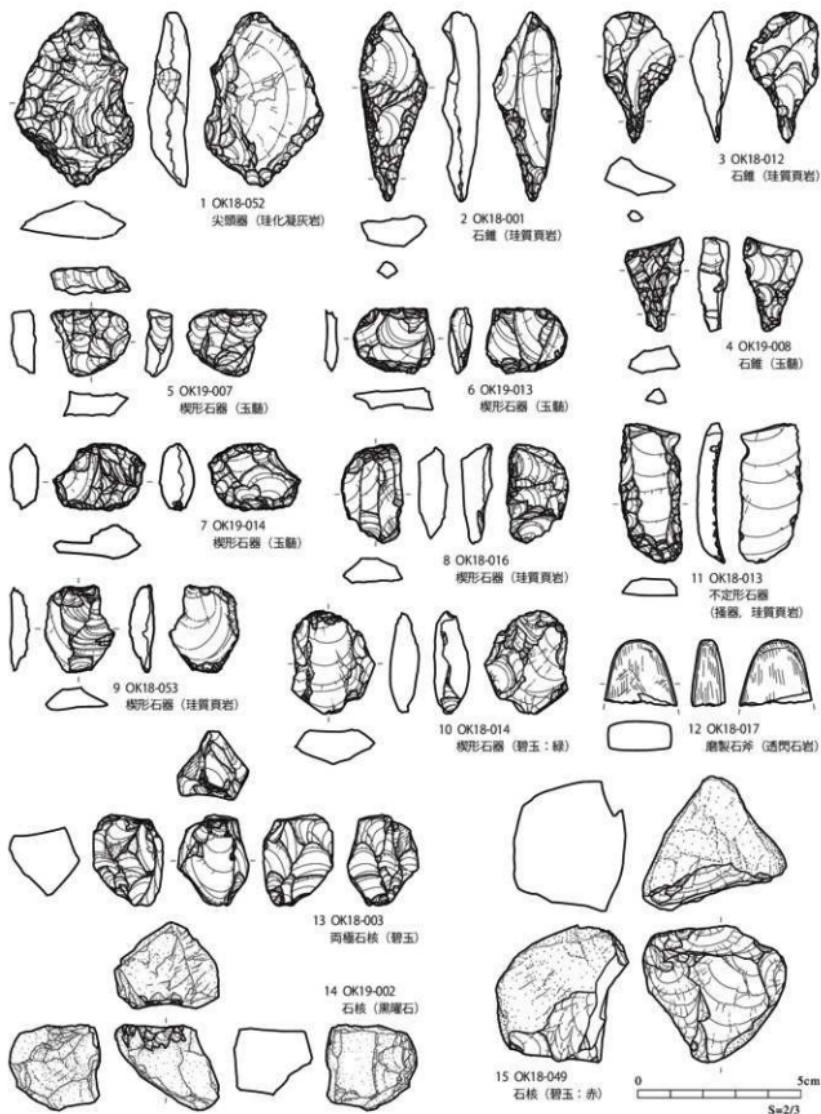


図3 大久保遺跡出土石器（2）

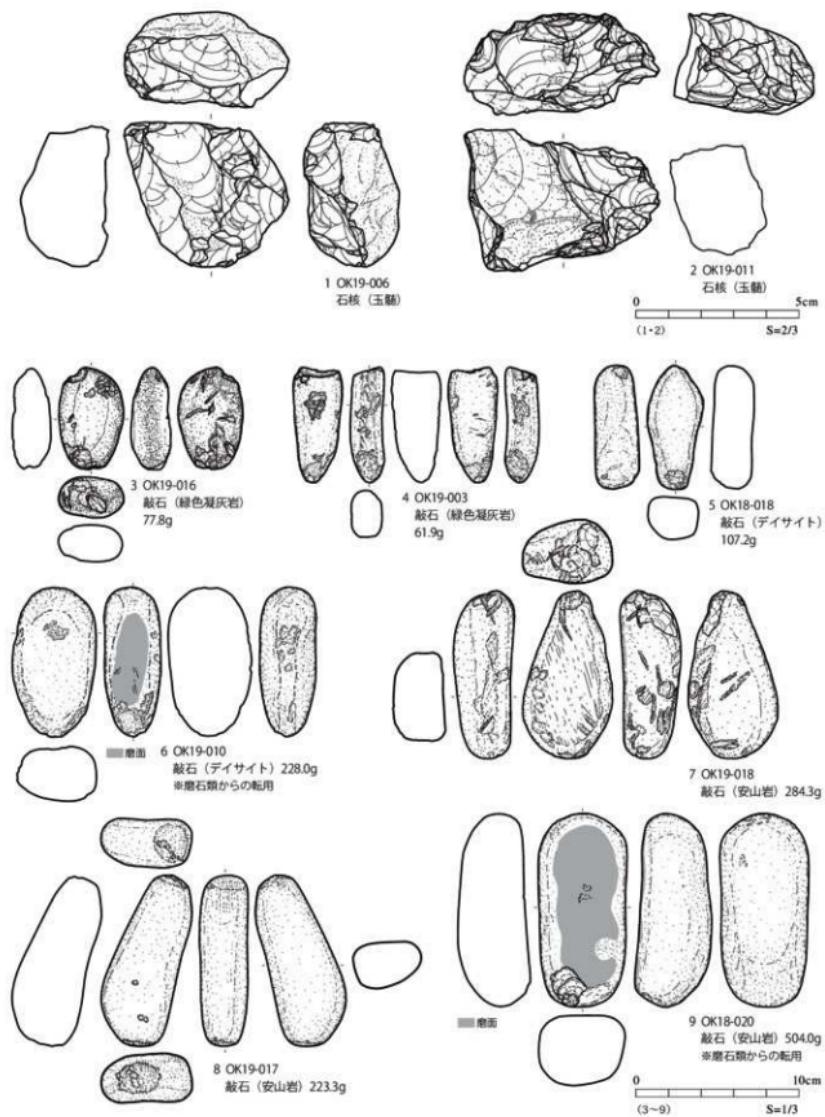


図4 大久保遺跡出土石器（3）

(長瀬 2018)。石器製作においては、打撃や押圧による剥離性が良好で、製作・使用時の耐久性の高さが特徴と言える。非晶質の黒曜石やガラス質流紋岩、単結晶の水晶なども剥離性は良好であるが、玉髓などと比較すると耐久性は低く脆い。こうした石器製作への適性と量的な安定性から、蔵王東麓地域南部の在地石材の中で小原産玉髓が優位な位置を占め、本遺跡が形成されたと考えられる。

5.まとめ

石材原産地における集中的な石器製作活動の痕跡は、大規模な製作活動が展開され製品が遠隔地へ流通した広域型原産地遺跡と、比較的小規模な製作活動で製品は主に在地で消費された在地型原産地遺跡とに大別される。良質かつ大規模な石材原産地を持たない地域においては、在地石材資源の開発が積極的に行なわれ、小規模な石材産地ごとに在地型原産地遺跡が発達したと考えられる。

大久保遺跡は、縄文時代後期前葉における小原産玉髓の在地型原産地遺跡と考えられる。白石川流域の蔵王町南東部から白石盆地の周辺には、こうした原産地遺跡としての性格を併せ持つ集落が複数形成された可能性がある。これまで蔵王町北東部から村田盆地周辺の遺跡では玉髓質珪化木や黄碧玉など小泉産玉髓の利用が見られたが、小原産玉髓の特徴を持った石材は未確認であった。小原産・小泉産玉髓でそれぞれ主体を占める原石形態や岩質の肉眼的特徴は異なり、剥片や製品での判別もある程度可能である。これらの利用状況を遺跡間で比較検討することにより、蔵王東麓地域における在地石材の流通と利用の実態を具体的に明らかにできる可能性がある。

ところで、本遺跡の形成に先立つ縄文時代中期後葉には、山形県最上川中流域の集落において良質な珪質頁岩による集中的な石刃生産が行なわれ、その石刃や石刃製石器が宮城県側の集落へ交易品として流通していた(石井 1994, 会田 2000 ほか)。蔵王東麓においても、その恩恵を受けた集落が蔵王町湯坂山B遺跡、二屋敷遺跡などで確認されている。しかし、こうした専業的な石刃生産と流通は中期末までには衰退したらしい。一方、後期以降の宮城県域では本遺跡のような在地型原産地遺跡が大和町摺萩遺跡(後期末～晚期、宮城県教育委員会 1990)でも確認されている。上述のような奥羽山脈を挟んだ東西交流による高度に安定化した石材流通の衰退が、宮城県域における在地石材資源の積極的な利用を促したのであろうか。地域間交流の総合的な動向の把握と併せて検討が必要であろう。

参考・引用文献

- 会田容弘 2000 「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通－東北地方南部のありかた－」山形考古, 6-4, 山形考古学会
- 石井浩幸 1994 「縄文時代中期（大木 10 式期）の石器組成－寒河江川・最上川流域の遺跡調査から－」『西村山地域史の研究』12, 西村山地域史研究会
- 大場正善 2004 「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について－東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髓原産地遺跡からの予察－」宮城考古学, 6, 宮城県考古学会
- 鈴木雅 2021・印刷中「石器石材環境」『谷地遺跡』蔵王町文化財調査報告書, 26, 蔵王町教育委員会
- 鈴木雅・佐々木繁喜 2016 「縄文時代の蔵王東麓における黒曜石利用－谷地遺跡ほか出土黒曜石の原産地推定から－」宮城考古学, 18, 宮城県考古学会
- 須田富士子 2000 「宮城県における石器石材の基礎的研究」『一所懸命－佐藤広史君追悼論集－』佐藤広史君を偲ぶ会
- 長瀬敏郎 2018 「氷器の微細組織観察と形成過程の結晶学：シリカ氷器を中心にして」日本結晶学会誌, 60, 日本結晶学会
- 秦昭繁 2003 「東北地方の珪質頁岩石材環境」月刊考古学ジャーナル, 499, ニュー・サイエンス社
- 宮城県教育委員会 1990 「摺萩遺跡」宮城県文化財調査報告書, 132
- 吉川耕太郎 2020 「珪質頁岩産地」『縄文石器提要』考古調査ハンドブック, 20, 大工原豊ほか編, ニューサイエンス社

福島県国見町の史跡「阿津賀志山防壁」について

—文治5年奥州合戦の実証遺跡—

安田 稔（国見町企画調整課地域振興係）

1. 史跡の概要

阿津賀志山防壁は、文治5年(1189)に源頼朝が率いる鎌倉方と奥州藤原氏の軍勢が戦いを繰り広げた「奥州合戦」にともなう史跡である。堀と土塁から構成される防壁は、福島盆地(信達盆地)の平野部から宮城県境の峰に向かって平野が狭まっていく場所を遮断するように、また平泉方への入り口を塞ぐように築かれている。その総延長は阿津賀志山(標高 289.4 m)中腹から阿武隈川の旧氾濫原に至るまでの約 3.2 km を測る。当時の基幹交通路である東山道の陸上交通と阿武隈川に伴う河川交通双方を強く意識して設置され、二重の堀と三重の土塁からなる構造(二重堀構造)を基本とする。源平争乱から奥州合戦までの内乱期にとられた、交通路を遮断し要塞を構える戦術を現在に伝える、唯一最大の遺跡である。

2. 阿津賀志山防壁の現況

阿津賀志山中腹から始まる防壁は、現在の国道4号付近までの約 500 m の範囲が直線的に構築されている。国道4号北側地区では、外土塁上半が削られ外堀が埋まっているものの、幅 24 ~ 25 m で防壁の遺構が良好に確認できる。

平野部にはいると防壁は、おおむね滑川(阿武隈川水系)の河岸段丘を利用して、蛇行するように築かれている。前面の滑川とそれに伴う湿地帯(泥田)を堀とし、段丘の高低差を土塁に活かした造りとなっている。堀が1本となる範囲も一部存在するが、南端に近い下二重堀地区付近でふたたび二重堀構造となり、阿武隈川の旧氾濫原に至る。下二重堀地区は、長さ 200 m の範囲で堀と土塁が良好な状態で遺存し、その様子から地名としても残っている。

3. 阿津賀志山の合戦

阿津賀志山防壁を中心に展開した阿津賀志山の合戦は、源頼朝が率いる鎌倉方と大將軍藤原国衡が指揮する平泉方の双方数万の軍勢が対峙し、奥州合戦最大の激戦地となつた。本町を主戦場とする戦闘が3日間にわたり続き、その合戦の状況は『吾妻鏡』の記述により知ることができる。

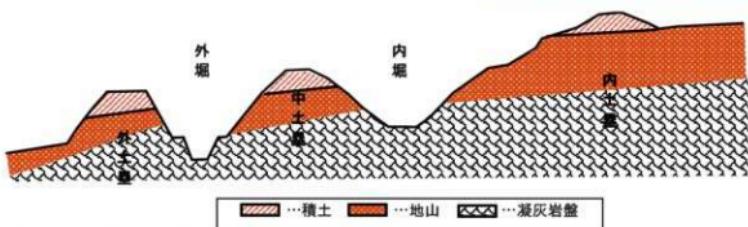
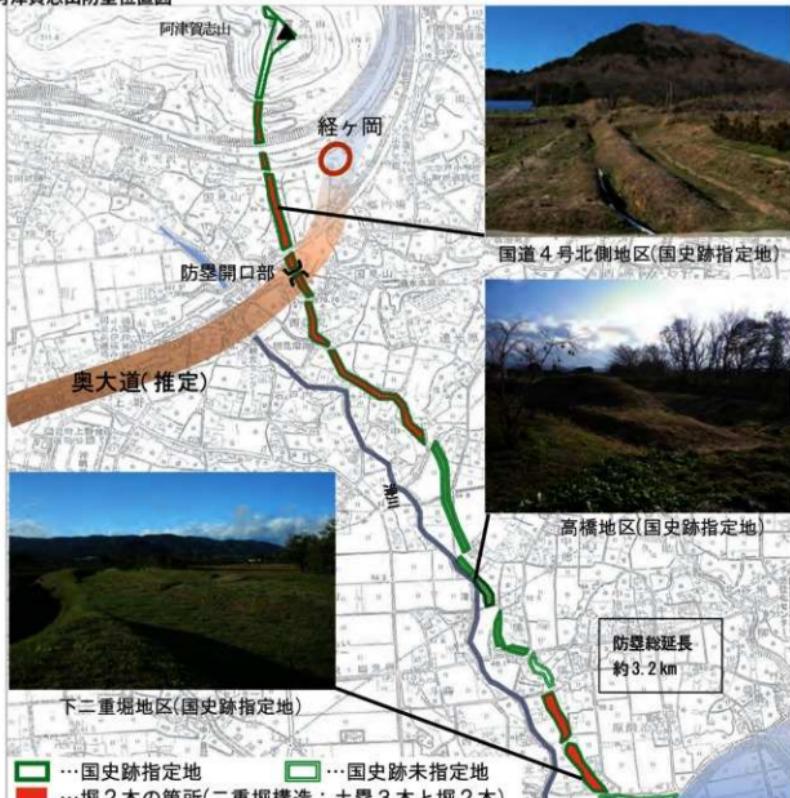
阿津賀志山の合戦での敗退以降、敗走を続けた奥州藤原氏の第4代当主藤原泰衡は、多賀城・平泉を放棄し北海道に逃れる途中、秋田県北東部(比内郡)の地にて家臣に殺害される。奥州藤原氏の滅亡は、阿津賀志山の合戦での勝敗で決したといつても過言ではなく、源平合戦から続く全国規模の内乱を終息へと向かわせる契機となつた。

阿津賀志山の合戦のながれ 斜文字…『吾妻鏡』文治5年(1189)の記述より

- 2月 9日 源頼朝 南九州島津にいたるまで動員令を発する(日本六十四ヶ国総動員令)
- 閏4月 30日 源義經、衣川館にて藤原泰衡の軍勢に攻められ殺害。
- 7月 19日 源頼朝が鎌倉を出陣。奥州藤原氏は、阿津賀志山に防壁を築いて待ち構える。
 「二品(源頼朝の麾向(出陣))のことを聞き、……阿津賀志山に城壁を築き要害を固め、国見宿と彼の山との間に、俄かに口五丈の堀を構えて、連隈河の流れを堰入れて柵とした」
- 7月 29日 源頼朝が白河関を越える。(大きな戦闘はなかった)
 「秋風に草木の露を払^{はらひ}せて 君が越れば関守も無し」(梶原景季)
- 8月 7日 源頼朝率いる鎌倉方の軍勢、国見駅(現在の国見町藤田と推定)に到着。
 奥州藤原方は、藤原国衡を大将とする、二万余騎の軍勢で待ち構える。
 「およよそ山中三十里の間、健士充満す」
 深夜に鎌倉方畠山重忠の部隊が、防壁突破に備え橋頭堡(進撃路)を築く。
 「(畠山)重忠は率いてきた人夫八十人を召し、用意していた鍔・鎧で土砂を運ばせ、かの堀を塞いだので、まったく人馬の障害がなかった。(重忠の)思慮はまったく神に通^つがるものである。」
- 8月 8日 阿津賀志山防壁を守る平泉方の金剛別当秀綱と鎌倉方の畠山重忠・小山朝光・加藤景廉・工藤行光・工藤祐光らにより戦闘が開始。攻防の末、秀綱の陣地が攻め落とされ、阿津賀志山防壁は破られる。
 同日には南に25kmの石那坂でも合戦が行われ、平泉方の信夫庄司佐藤基治らが、鎌倉方の中村入道念西(伊達朝宗)らに敗れる。
- 8月 9日 藤原国衡の本陣(大木戸)にて戦闘(こう着状態)。
 中村入道念西ら石那坂の合戦にて打ち取った信夫庄司佐藤一族の首を、経ヶ岡にてさらす。
- 8月 10日 藤原国衡の本陣での激戦。鎌倉方の奇襲により国衡は敗走。
 「(鎌倉方)7人の武将が伊達郡藤田宿より会津の方に向かって土湯の嶽、鳥取越などを越え、大木戸の上にある国衡の後陣の山によじ登ると、時の声をあげて矢を放った」
 敗退を知った藤原泰衡は、総本陣としていた国分原鞭楯(仙台市宮城野区榴ヶ岡付近)を放棄し、平泉へ向け敗走。藤原国衡は、宮城県大河原町付近で追撃を受け討ち死に。
- 8月 12日 源頼朝、多賀国府に到着。
- 8月 22日 源頼朝、平泉に到着。藤原泰衡は自らの館を燃やし北逃。
- 9月 3日 藤原泰衡、贊柵(秋田県大館市)にて家臣の河田次郎に殺害。
- 9月 4日 源頼朝、陣ヶ岡に着陣。北陸道(出羽国)を進んだ軍勢も加わり28万4千騎となつた。

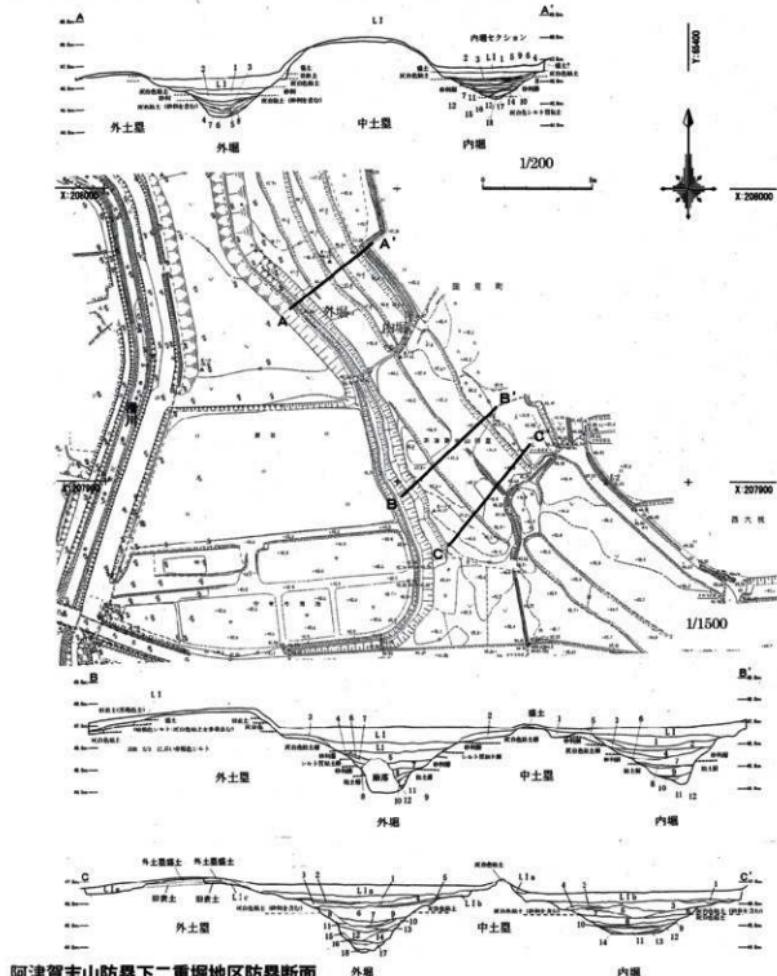


阿津賀志山防壁位置図



阿津賀志山防壁断面模式図(国道4号地区)

奥州藤原氏により築かれた 3.2 km の阿津賀志山防壁は、のべ 25 万人の労働力が動員され、藤原国衡の本陣である「大木戸」などを合わせると総計 40 万人が動員されたとみても大過はないとの推定がなされている（小林 1979：発掘調査による作業員労働時間を基礎に算出）。当時の奥州藤原氏が、源頼朝を迎撃するために総力をあげ、広域的な動員（動員範囲は宮城県域の刈田郡、福島県域の伊達郡・信夫郡に及ぶと考えられる）により構築した遺構である。



阿津賀志山防壁下二重堀地区防壁断面

文治5年奥州合戦の実証遺跡としての阿津賀志山防壁

阿津賀志山防壁は福島県と宮城県の県境に位置するが、この境界ラインは6世紀における大和政権の地方統治システムである国造制が敷かれた最北ラインと重なるラインである。このことからすれば福島県域は東北地方においても早くから機内を中心とする中央集権国家圏内に含まれていたことが知られ、7世紀後葉段階でいち早く県内の郡術機構が整備されたことでもそのことを知ることができる。

また12世紀には在地豪族による中央の権門勢家を恃んだ荘園化が進む地域であり、宮城県以北とは異なる地域的特色を有していたということができる。このような背景を持つ県境ラインに築かれた防壁は、藤原氏が南に勢力を伸ばすために超えていかなければならない衣川ライン・多賀城ライン等に次ぐ最南部ラインとすることでき、さらにその南部に重臣である佐藤氏一族が勢力を張ることで睨みを利かせていたと考えることができる。

阿津賀志山防壁は合戦に備えるために急遽築かれた前線防御施設であるが、古代以降の歴史的観点からしても実に意味深い場所に築かれた施設であり、その構築のための動員体制を考えれば、東北南部における藤原氏の実質支配を実証できる貴重な遺構とすることができる。

文治五年奥州合戦は、1180年（治承4年）の以仁王の挙兵にあわせた平家追討の令旨に端を発する10年間にわたって繰り広げられた古代最後の内乱（治承・文治の内乱）の最終合戦である。初めての武家政権樹立者である平清盛に連なる平家一門を壇ノ浦に滅ぼし、関東以西を手中に収めた源頼朝は、その矛先を義経追討を口実として奥州藤原氏へと向け、文治五年奥州合戦へと突入する。

動員された軍勢は、奥州藤原氏が陸奥・出羽の2ヶ国を合わせ17万騎（『吾妻鏡』文治五年九月七日条）と記され、源頼朝率いる鎌倉方の軍勢が「軍士二十八万四千騎、ただし諸人の郎従等を加う」（『吾妻鏡』文治五年九月四日条）との記述がある。また、鎌倉方は、出羽・陸奥を除く六十四か国の武士が動員されたことも明らかになっており（入間田1983）、全国的な規模での合戦であった。このことは、鎌倉幕府の成立を目指す源頼朝による時代の転換となる合戦であったことを物語っている。全国的な規模での時代の転換もさることながら、東北地方においては奥州合戦の功績により奥州藤原氏に代わる新たな領主として、中世から近世の東北史において中心的役割を果たす伊達氏・相馬氏・葛西氏などが入部することとなり、大きな分岐点となった。

以上の要素を持つ奥州合戦において、最大の合戦が繰り広げられ、同合戦によって構築された唯一の国史跡であるのが阿津賀志山防壁である。阿津賀志山防壁は、奥州合戦最大の激戦地となり、奥州藤原氏の敗北が決定的となっただけでなく、その後の東北史に影響を及ぼすほどの大きな出来事を現在に伝える歴史遺産である。

引用・参考文献

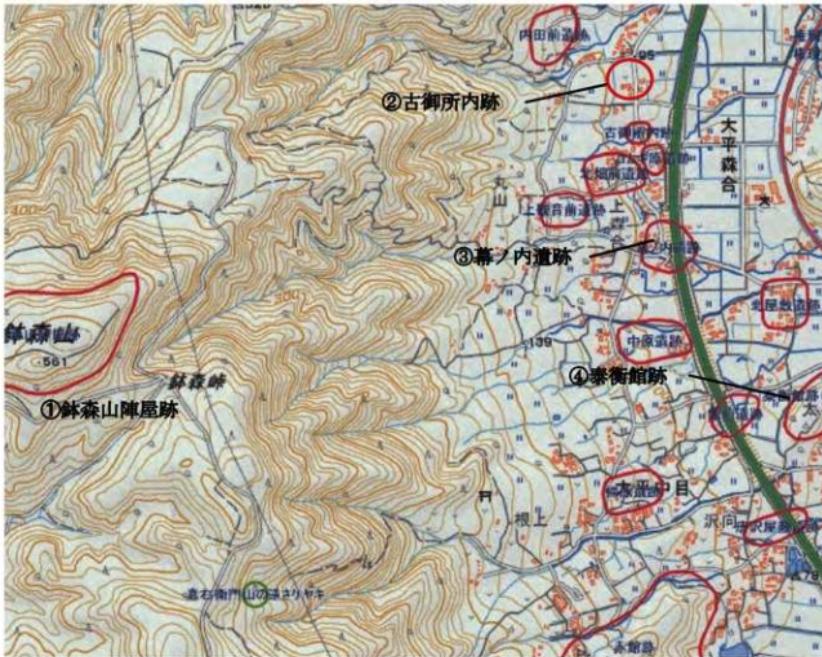
- 小林 清治 1979「奥州合戦と二重堀」『郷土の研究』第10号 国見町郷土史研究会
- 入間田 宣夫 1983「文治5年奥州合戦と阿津賀志山二重堀」『郷土の研究』第13号 国見町郷土史研究会
- 平泉町 2012『平泉—光と水の浄土』

宮城県白石市大平 鉢森山伝承の館跡について

佐藤 充（あずま街道探訪会）

1. はじめに

白石盆地の西側に鎮座する標高 576m の鉢森山は、鉢を伏せたような山容なのでつけられたと伝えられている。地元住人は鉢森山を「西山」「にっしゃま」と呼んでいる。当山周辺の地理状況は、狹隘谷底地形の白石盆地のほぼ中央を、南から流れる斎が川（国土地理院地図では「斎川」）。以後「斎が川」という）は暴れ川と言われ、谷底平野・氾濫原である。当山の東斜面は急峻な崖地形で形成された複合扇状地である。南の越河と同様に山間と狹隘の谷底地形のため、交通の難所といわれてきた。戦国時代以前までは軍事上では要衝の地であり、大和時代から時の中央政権の領土拡大と在住豪族との領土侵害争いの地でもあった。伝承として、用明天皇、坂上田村麻呂、源頼義・義家親子、あるいは鎌倉政権樹立を目指す頼朝と奥州の平泉藤原との激戦地や南北朝・戦国時代の多数の館跡等がある。



第1図 鉢森山周辺図及び遺跡位置（宮城県遺跡地図・国土地理院地図から）

昔話や伝説や神社祭事を地域独自の文化として捉えると、何か教示されるものがあり次世代に少しでも繋げていければと考え、史跡の現地調査や昔の地理状況や昔話や伝説を地元の人から聞き取り調査を行い、書き留めた。その中で陣屋、館として伝承されてきた跡を紹介したい。

2. 陣屋、館跡の伝承資料及び調査

調査に至る経過

2019年10月の台風によって、白石市南町の旧字「兀山」^{（あきらまやま）}では土砂崩れが起き、片倉信光氏の収集資料も被害を受けた。筆者宅が片倉氏宅の隣にあるよしみから、旧蔵されていた資料に接する機会があった。その中には、片倉氏が鉢森山の館跡を現地踏査した折に作成した略図を含む記録類も含まれていた。

筆者は以前に風間觀静氏（1984）や中橋彰吾氏（1997）が唱えた「あずま街道」西廻り説に関心を持ち、調査を重ねて来た（あずま街道探訪会2018a・2018b）。ここに報告する鉢森山周辺の現地調査は、2020年1月～4月にかけて、佐久間良男氏とともに行ったものである。

①鉢森山陣屋跡：白石市大平森合鉢森山

宮城県遺跡地名表には「立地：丘陵、種別：散布地・陣屋、時代：縄文・中世、出土品：石鎌」とある。

『白石市史』3の（2）特別史下の（1）「白石地方の伝承 鉢森山」（飯沼1984）には、「前九年役（1051～1062）で安倍貞任などを討つため奥州に下った八幡太郎義家が陣所としたと『安永風土記御用書出』（以後「安永」という。仙台藩が安永年間（1772～1781）に村或いは知行所単位に「風土記御用書出」として提出させたもの）に記される。山頂に約200mほどの空濠らしい跡が残されている。お寺も建て、四坊平という地名も残されている。井戸らしい物や物見台・札立場などがあったという。また、破魔射場（はまいば）といって、鉢森山道附近に七、八間四方（13m前後）の広場があるが、「安永」には、義家が軍神祭の矢初（やそ）をしたところと伝えられている」とある（註1）。

頂上部分は全面的に雑木林。①比較的平坦な平場を呈している。②この北側にわずかに段差のある地形。③～⑤頂上を二分するように、土壙の地形が東西方向にあることを確認。土壙北側（陣屋側）から高さ1mくらいあり、土壙南側の空壕底から1.5mくらいある。（○内番号は写真と付合）



第2図 鉢森山陣屋跡



① 南東端から西方向の平坦な状況



③ 平場 北側にある土壁らしきものと段差の地形が見られる（茶破線）。



④ ⑤ 頂上の東側の林道（左）沿いに土盛りされた土壁跡（右）を確認できる（茶破線）。



④ 土壁跡（左）からの西方向撮影。土壁の右側が館の内側になる。



⑤ 空堀跡（中央の塹み） 右側が土壁の形状を呈している（茶破線）。

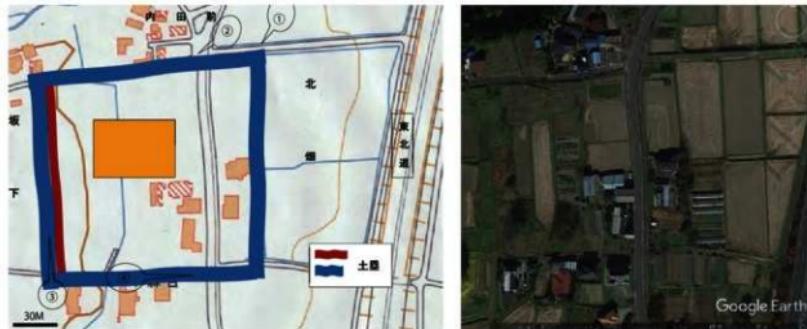
2020年（令和2年）4月25日、佐藤充・佐久間良氏調査。

第3図 鉢森山陣屋跡の調査

②古御所内跡：白石市大平森合字北畠前

宮城県遺跡地名表に「立地：丘陵、種別：陣屋、時代：中世、「安永」には「古御所内 右ハ文治年中頼朝公錦戸太郎御貢被遊候節御所跡之申傳候當時ハ郭之堀等不残田畠二能成候事」とある。

「白石地方の伝承 古御所内」（飯沼 1984）には「源頼義・義家父子の鉢森山にあった陣所は、冬になると麓に下がり、父頼義は御所内へ、義家は幕の内に陣を取った」とある。



①片倉信光（1968）を下に南北約100m、東西約120mの規模の陣屋であったと想定される。円形吹き出しの番号は第5図写真に付合。

2020年（令和2年）1月19日調査。

②古御所内跡（Google Earthから）

2020.11.17撮影画像

第4図 古御所内跡



③御所内跡の北東隅から南西方向に撮影。写真中央のコンクリート擁壁部分の上部分が古御所内跡。



②古御所内跡の北東側から西方向に撮影。源義家の守り本尊を祀るという森合観音堂へと小道は続く。



③古御所内跡の南西側から北方向に撮影。写真中央の土堤が土塁跡。古御所内跡の北西端まで南北に続く。



④古御所内跡の南辺を東方向に撮影。写真左側が若干高まっている。

第5図 古御所内跡の調査

③幕ノ内遺跡：白石市大平森合字幕ノ内

宮城県遺跡地名表には「立地：丘陵 種別：散布地、陣屋 時代：古代。中世出土品須恵器」、白石市史には「伝承によると、前九年の役のとき、源義家の宿营地だと称している」（飯沼 1984）である。

④泰衡館（太平館）跡：白石市大平中目字太平前

宮城県遺跡地名表には「立地：丘陵 種別：陣屋 時代：中世、白石市史には「太平山 藤原泰衡が築いたといわれる。」（飯沼 1984）である。



高橋宅屋敷の北側にある土盛り。源義家の宿营時の土塁と想定。

第6図 幕ノ内遺跡の調査



泰衡（太平）館遺構図（白石市史から複写）
○内番号は写真と付合



泰衡館跡（Google Earth から）
2020.11.17撮影画像



泰衡館跡南東側空の全景。写真中央が国道4号線。
写真左側の背景が鉢森山の稜線。



①太平神社境内南側は広い平場があり、現在、柿が植栽されている。



②境内には土塁が残っている。



③境内東側にある曲輪の平場。

第7図 泰衡館跡の調査

4. おわりに

約40年前の市史発行時と比較すると少數が伝承されていることが分かった。今後も明るい展望は見えないが、後世に受け継ぐための「歴史の伝承」を図ることを望んでいる。最後にこの地区の歴史・伝承調査にご協力を頂きました方々に感謝申し上げます。

註

1) 片倉信光編 1958『郷土の話』(白石第一小学校社会科資料3)には、鉢森山は「小原山」として、以下のようにほぼ同様の伝承が記されている。少し長文になるが、引用する。「……源義家は父親の頼義というえらい大将といっしょにエゾを征伐に来た人で刈田郡にはこの人たちの陣を張ったと云う場所も伝えられています。それは「小原山」です。あの小原山の上には、今でも空堀の跡や館のあとが、はっきりとのこっていますし、その頃お寺も建てたと云う「四坊平」という場所も残っていますが、ここは其時、賊が早く降参して国が平和になるように祈願をこめるために寺をたてたところだと思います。又附近には井戸の跡や陣屋をたてた時の土台石とか、物見岩や札立場、御仕置場などがあつたところと伝えられています。今大平村(小原山のふもと)中目・森合などには「幕の内・御所の内・赤毛屋敷」等というところがありますが、それも丁度この時(前九年役)に小原山の上に陣をとっていて冬になったので敵の来ない時は山を下って、ふもとの村々に宿っていたためだと云い、頼義がいた処が「御所の内」、義家のいたところが「幕の内」、又頼義の乗っていた赤毛という愛馬を葬ったところが「赤毛屋敷」だと云っています。先年赤毛屋敷で畠をほった時、馬のくつわや其の他の馬具が掘出されたので馬を葬ったと云ういい伝えが正しかったとそれを再び丁寧に埋めました。こんな云い伝えにある頼義・義家などというえらい大将は一体誰と戦ったのでしょうか。(以下、略)」

引用・参考文献

- 刈田郡教育会編 1928『刈田郡誌 全』
- 宮城県史編纂員会 1954『風土記御用書出等 刈田郡』『宮城県史』第23 資料編第1
- 片倉信光編 1958『郷土の話』白石第一小学校社会科資料3
- 片倉信光 1968『森合めぐり』『白石市郷土研究会会報』第1号
- 風間観静 1984『地名の研究』『白石市史』3の(2)
- 飯沼寅治 1984『白石地方の伝承』『白石市史』3の(2)
- 中橋彰吾 1997『幻の東街道を求めて』『広報しろいし』第458号
- あずま街道探訪会 2018a『古道「あずま街道」調査報告書』
- あずま街道探訪会 2018b『古道あずま街道を訪ねる』
- 相原淳一 2019「吾妻海道」と片倉氏入部以前の白石—佐藤潤先生調整「佐近商店包紙の図」から—『仙台郷土研究』復刊第44卷第2号
- 八島忠賢・佐藤充 2021『西山物語』嘉右衛門ケヤキ会
- 宮城県遺跡地図・地名表(インターネット2021年版)

刈田郡湯原城跡

吉井 宏

遺跡名：湯原館跡（宮城県遺跡登録番号 04027）

遺跡面積：約 33,000m²

所在地：七ヶ宿町字湯原・字町裏地内

調査原因：学術調査

調査担当：吉井宏（当時、東北福祉大学教授）

調査協力：上廣倫理財団・七ヶ宿町教育委員会

調査面積：第1次調査 42.5m²、第2次調査 48m²

調査期間：第1次調査 平成28年4月29日～5月5日

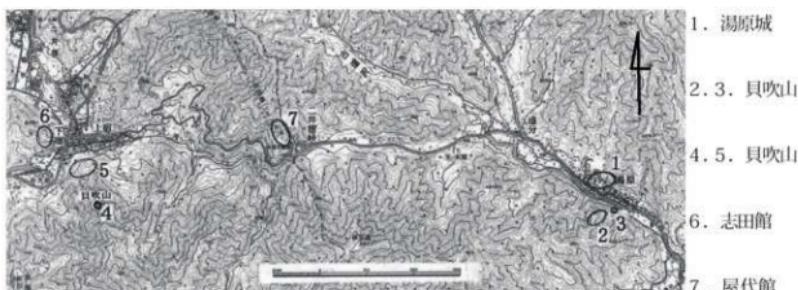
第2次調査 平成28年10月8日～10月12日



第1図 湯原周辺図

(国土地理院2万5千分の1地形図に加筆)

1. 地理的歴史的環境



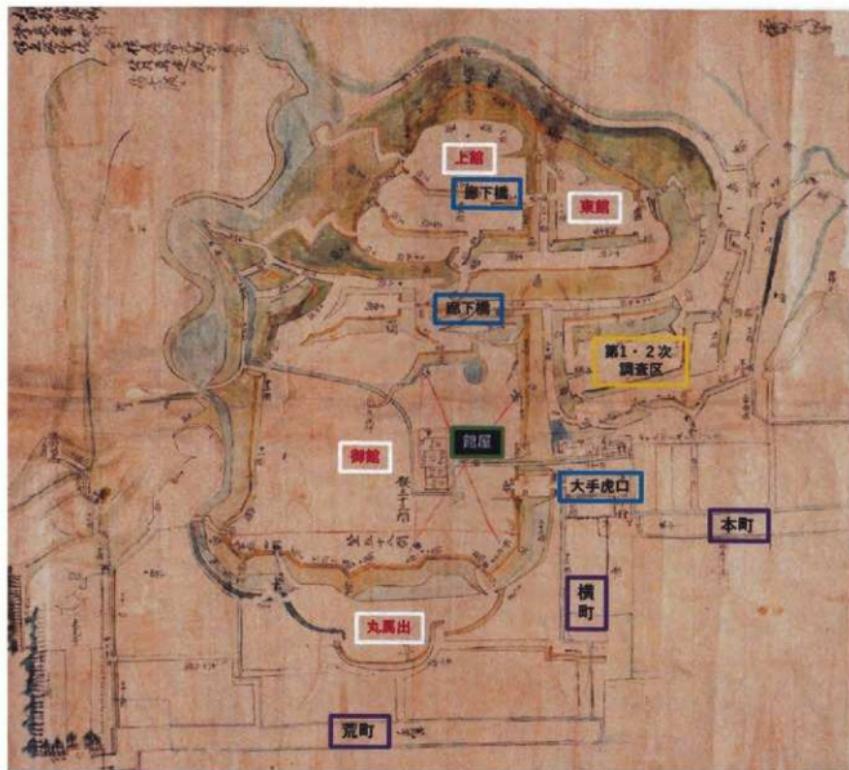
第2図 湤原～二井宿の中世城館 (国土地理院2万5千分の1地形図に加筆)

阿武隈水系白石川の水源は鏡清水である。刈田郡七ヶ宿町の最北東部にある。少し北に向かえば金山峠があり、越えれば山形県上山に向かう。その道が近世の山中通り・七ヶ宿通りである。これを戻って源流脇を南下すると、追分で米沢・高畠方面からの二井宿通りと合流する。二井宿には志田館、貝吹山城そして屋代峠の屋代館があった。追分の東に湯原城・貝吹山城がある。両城は、奥羽南部を横断する山中通り、そして湯原宿を、白石川を挟んで南北から見下ろす。しかし湯原城及びその周辺の歴史を語る中世史料はほとんど無い。天文の乱のさなか、稙宗は天文16年(1547)に湯原を攻拔

せよとの命を下しており（『伊達正統世次考』）、湯原にすでに城があったことを窺わせる程度である。また16世紀の第4四半期、天正期には湯原に伊達氏の城が存在したことを暗示する文言が史料に再三登場する。

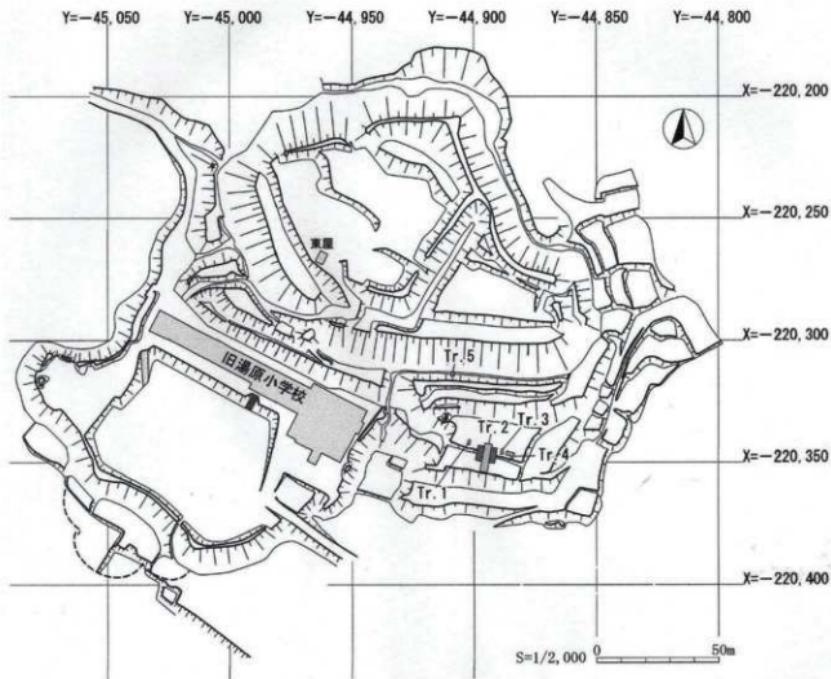
天正19年（1591）政宗が葛西大崎領に移されて以後、湯原一帯は蒲生氏、続いて上杉氏が支配するが、その後の慶長5年（1600）に上杉景勝より剣田郡を取り戻した政宗は横尾氏を湯原城に置いた。横尾氏のあと城を預かるのは角田の石川氏である。石川氏はここに役所を置いて家臣を藩境警護に当たらせた。

2. 城郭の概要



第3図 剣田郡湯原城絵図 （個人蔵 七ヶ宿町水と歴史の館提供）

「刈田郡湯原城絵図」は石川家の家臣で湯原城番に当たる鎌田家に伝わってきた。描き方から原本は江戸初期、加筆部分はおそらく廢城期にまで下ると思われる。城絵図と現存遺構とを比較すると、絵図の精密さと遺構の残存状況の良さに気がつく。ただし近代以後、小学校が置かれた関係で「御館」周辺は大きく変容した。また「御館」すなわち二ノ丸の下に設けられた「丸馬出」は民家と畑に変わった。それでも樹形虎口など御館周辺以外の遺構は極めてよく残っている。



第4図 湯原城跡測量図 (Tr ○は、第1・2次調査のトレンチ名を指す)

3. 発掘調査の経緯と成果

湯原城の文化財的価値に一定の判断を下すため、湯原城跡調査団が有志によって組織され、上廣財団の支援を受けて全体測量と部分発掘を実施した。発掘調査には地元有志も加わった。

対象となった曲輪は略長方形をなし、面積はおよそ 700m²の小さな曲輪で、湯原宿及び山中通りを眼下におさめる。最近まで畠として使用されてきたため、上層は耕作による擾乱を受けているが、

2回の発掘調査を通じて複数の遺構面の存在が分かった。

第1面は第2面まで掘り下げていく過程で確定した面で、柱穴列2列、ピット1基を検出した。

第2面では6条の並行する不整形な小溝を検出した。畠の畝溝であろう。

第3面はTr1～Tr4の全面に及ぶ段切りによって上下2段の平場に分けられる。段差は80～90cmあり、下段との接点に深さ20～40cm、上幅1～1.5mの溝が並行する。方向はN—72.5°—Wを指す。

下段平場では掘立柱建物跡1棟、柱穴列2列、炉跡1基、ほかにピット、土坑類を検出した。

掘立柱建物跡は南北1間×東西2間分を確認したが、さらにトレント外に延びる可能性がある。一つを除く他のすべての柱穴には柱痕跡が明瞭に残っていた。棟方向はN—74.5°—Wを指す。

炉跡は直径約50cm、検出面からの深さ10cmの窪みに赤褐色土が堆積し、底面は著しく被熱して硬化した炉床面となっている。窪みの周囲には灰白色粘土を環状に盛り上げた様相が窺えた。

Tr5は空堀の形状、規模の把握を目的として設定したものである。調査の結果、3層に及ぶ堆積層の下56cmに幅66cmの平坦な堀底が出現した。堀南壁の傾斜角度は約42°である。

出土遺物は第1次・第2次調査の合計で79点を数えるが、その多くは近世～近代の遺物の細片で、表土層から出土した。中世遺物を例挙すると以下の通りである。

明代の青花端反碗は第2面直上より出土した。15世紀代のものであろうか。瀬戸美濃産の端反碗は15世紀末～16世紀初頭にかけてのもので、第2面構成土中に出土したものと第3面直上で出土したものが接合できた。ほかに瓦質擂鉢・火鉢、初鋳年がともに15世紀前半の「永楽通宝」・「宣徳通宝」が出土した。またTr5の空堀の埋土上層中から高畠石と通称される多孔質溶結凝灰岩製石臼が出土している。

4.まとめにかえて

第2面構成土や第3面直上で出土した遺物はいずれも、天文の乱のあった16世紀前半までのものである。それらの出土により湯原城が中世に遡る城であることが証明された。また調査した曲輪は、遺構、遺物とともに生活に密着した曲輪で、中世を通じて複数回の改修を受けたことが明らかになった。

なお、本遺跡は宮城県遺跡登録上「湯原館」であるが、ここでは「湯原城」を使用した。これは「湯原城絵図」が「城」を使用していること、「湯原館」は「御館」と混乱する可能性があることが理由である。



写真 1 湯原宿



写真 2 第1次調査 Tr2 設定



写真 3 第2面（西より）



写真 4 Tr2 最終写真



写真 5 Tr2 最終写真（西より）



写真6 溝断面



写真7 炉跡



写真8 青花端反碗



写真9 濑戸美濃端反碗



写真10 宣德通宝



写真11 多孔質溶結凝灰岩製石臼

新版 片倉家中「小関家」文書

—片倉家中中級武士の知行受給—

立田 基生（白石古文書の会）

はじめに

この冊子は、「片倉家中武家屋敷・小関家」に代々保存されていた「文書」を紹介するものです。令和元年11月、小関家に生きた小関かず様の一周年忌に発行した冊子（旧版の『片倉家中「小関家」古文書』）を基に、その時に取り上げることが出来なかつたものを追加して取り上げた。

今、白石市、仙南地方では「武家屋敷」と言えば「小関家」の屋敷をさしている。家屋については小関家に資料は残されていないが、「家系」に関する文書、「知行」に関する文書などが残されているので、江戸時代、明治初期の社会の一端を垣間見ることが出来ます。

今回は、「知行」に関する文書を中心に取り上げた。

1. 受け継がれてきた文書

保存されてきた文書を下記のように分類した。

I. 小関家の「家系図」・「一代の記録留」など	4点
II. 小関家の「知行宛行書」・「水牒」・「御知行田数覚」など	15点
III. その他（「書状」「紫根染秘伝」「覚」（仙台藩家臣・片倉家中など）・その他）	11点
IV. 大波（浪）家の「知行宛行書」	12点
V. 大波巻物（武道に関する文書）	7点

その他に（片倉信光氏の著書）（小関家当主の著書）（明治初期のスケッチ）

- ・ 文書は虫食いなどで保存状態が悪いものもある。また、小関家から貸し出したが返却されなかつたものもある。（コピーしたものを見出されたと思われる。）
- ・ 大波家に係る文書がなぜ、小関家に保存されてきたかについては現在分からぬ。小関家と大波家のつながりが不明である。
- ・ （片倉信光氏の著書）と（小関家当主の著書）は文化財の保存にかけた両氏の想いを伝えるために本冊子に掲載した。
- ・ （明治初期のスケッチ）は明治初期のものと思われるが、江戸時代の小関家の屋敷全体の様子を映し出していると思われる。現在の文化財としての「武家屋敷」には見られない「表屋」「糀倉」「風呂場・閑所」「水車小屋」が描かれているのでこの冊子に挿入した。尚、水車小屋が見られることで「水路」もあるはずであるが、残念ながら描かれてはいない。

2. 文化財としての武家屋敷

- ・ 平成元年（1989）小関家の当主は、（武家）屋敷と土地の一部を白石市に寄贈した。それまでは

当主の家族が屋敷を守り住んでいた。住人は屋敷の南側に移って住むことになった。

- 平成3年に家屋は解体され、復元された。
 - 解体時に発見された墨書「享保15年（1716）2月12日」によって、約305年前の建築物であることがわかった。創建年代の明らかな貴重な遺構として保存されている。
 - 「武家屋敷」としての主な特徴して、
 - 「武者窓」と言われるものが土塀にあり、門の様子を家の中から、又、裏庭から見ることが出来る。
 - 屋敷には玄関が無く、客は中門から座敷に上がるようになっている。
 - 農家の生活として、穀倉や裏に畑や水車小屋が屋敷内に見られる。
- そこで、「農家住宅を素地として次第に武家住宅として体制を整えてくる、中・下級の武士住宅の原初的な形態を示す点で貴重な遺構である。」（佐藤巧・西野敏信・小山裕司編 1994『宮城県指定有形文化財 旧小関家住宅修理工事報告書』p 15：白石市）

3. 小関家の家譜（片倉家家臣へのいきさつ）

① 「家系図」の写真版



② 家系図の翻刻文

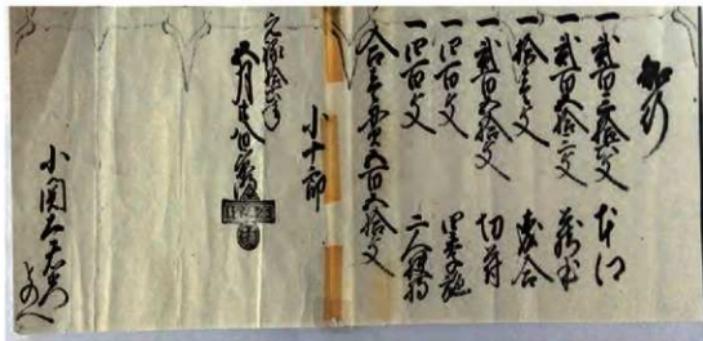
一 小関家系 翻刻文
四百三拾文 御知行高壹貫九百五十文 小関衛門七元炬
元 成 始 三太郎
家紋 丸之内三ツ茶ノ実
松前八之助 柳家中小関
弥右衛門元直次男二御座候
少林院穂
御当家様江延宝八年被為
入候節元成十二歳ニ而被召連
直々
少林院様江被召仕御扶持方
御切符被下置候身分通ハ相知
不申候其後御料理人被成下
元禄七年願之上定御供
右定御供十カ年相勤候
被仰付同十六年四月中
為御賞持來取合老貢
五百五十文之高ニ御知行
被下置御墨印頂戴仕候

③ 片倉家臣へのいきさつと受給

- 1) 小関家の初代当主は、松前八之助家中の小関弥右衛門の次男で「小関太右衛門元成」
松前八之助（広国）は仙台藩の家臣・準一家。（広国は松前藩初代藩主松前慶広の七男）
- 2) 初代当主は、（少林院様=松前八之助の姫）が、片倉4代片倉村長へ嫁ぐ際に、延宝8年「12歳で被召連、少林院江被召」、片倉家の家臣になる。（松前家と片倉家は深い関係がある！）
- 3) 延宝8年（1680）「身分相不知申」（扶持・切符を受給）
- 4) 元禄7年（1694）に「定御供被仰付」
- 5) 10年後（元禄16年・1703）に一貫550文の墨印
- 6) その後の身分等……「御番入土」「御番頭上之列」の記録がみられる。

4. 小関家の知行受給の経緯

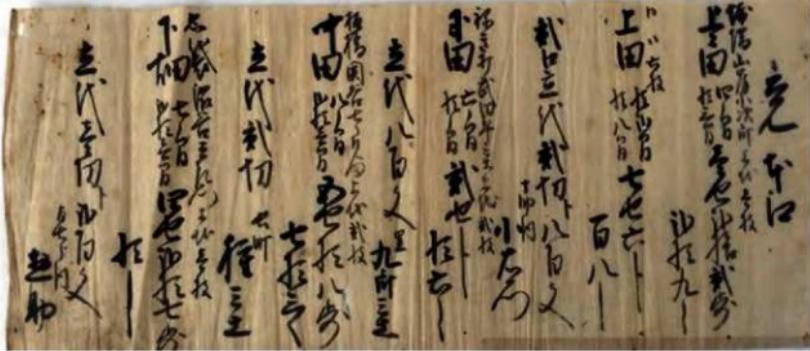
① 最初の知行宛行書 元禄拾六年（1703）の写真版



② 元禄拾六年の知行宛行書の翻刻文と解説

〔知行宛行状・所有地〕 翻刻文	
①	元禄拾六年（一七〇三）コピー
知行	
○	武百三拾六文 本郷
○	武百五拾三文 蔡本
○	拾壱文 森合
○	武百五拾文 切符
○	四百文 四季施
○	四百文 切符
○	五百五拾文 武人扶持
○	五百五拾文 小十郎
元禄拾六年	
五月廿八日	景明黒印
○	〔解説〕
○	「切符」とは手形（証文）であり、
○	仙台藩での「切米」のことと思われる。
○	「四季施（しきせ）」とは時季に応じて主人から奉公人へ衣服を与えること。また、藩主側近に仕える者に夏冬に与えられる衣服である。
○	「村定」は片倉家六代当主
※	扶持米「米で支給される穀米。
一人扶持は一日一人米五合年一石八斗」	

③-1 元禄拾六年水牒（本郷分）の写真版



③-2 元禄拾六年の水牒（本郷分）の翻刻文

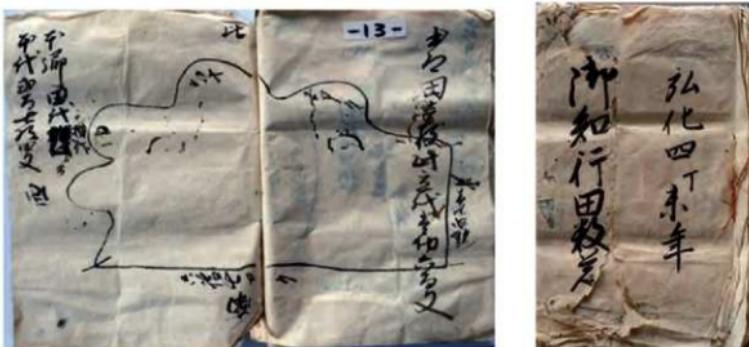
堀端	本郷	山岸小次郎	上地	壱枚
上々田	四間	壱セ武拾	式歩	
		拾三間	式拾九文	
同	同六枚			
上田	拾式間	七七六步		
	拾八間	百八文		
式口立代	式切ト八百文			
十助内	小右衛門			
祢ぎ打	武田平兵衛	上地	式枚	
下田	六間	式七步		
	拾間	拾八文		
立代	八百文	里	郎兵衛	
板橋	関谷七郎左衛門	上地	式枚	
中田	八間	五七拾八步		
	式拾三間	七拾三文		
立代	武切			
	長町	権兵衛		
名袋	涉谷兵左衛門	上地	壱枚	
下畑	七間	四七式拾七步		
立代	壱切ト式百文			
与七郎内	惣助			
(本郷合計)	一三六文			
(上地) 何らか理由で知行地を取公したもの)				

④ 明治 3 年（1870）の「覚（所有地）」の翻刻文

一 式百七拾四文	本鄉
内拾三束刈	松木前
内式拾五束刈	四斗入
内式拾五束刈	板橋
内拾五束刈	式口式俵
内拾五束刈	柳下
内烟拾文	式俵半
内烟拾文	十王堂
内烟拾文	金三切
三百七拾五文	藏本
内四拾刈	灌下
内四拾刈	四斗五升入
内四拾刈	俵半
内式拾刈	上原
内式拾刈	四斗入壹俵半
内四拾刈	中原
内四拾刈	壹俵半
内烟八文	須郷田
内烟八文	壹切
内烟壹枚	式朱
一 四文	郡山
内烟壹枚	三朱
一 七拾六文	森合
内式拾大平前	壹俵五升
一 式百七又	中ノ目
内四拾刈	大平前
一 五拾文	三澤
内式拾刈	旧宝物前
内式拾刈	式俵半
右之通書上仕候以上	長袋
明治三年二月廿六日	森穴前
右之通書上仕候以上	老俵

⑤ 御知行田数覚 弘化4年（1847）の写真版

本郷分と表紙



⑥ 「御知行田数覚」について

- 「御知行田数覚」には受給された知行地の場所や長さ、形状が記入されている。
- この絵図では本郷は田が1枚で本代 274 文と記されている。本郷の本代は元禄 16 年では田が4枚、本代 236 文、明和元年に田が2枚、38 文加増されて 274 文になっている。
- 不明な面も多い。

⑦ 知行宛行書等に見られる知行高の推移

- 元禄 16 年・享保 17 年・延享 2 年： 1 貫 550 文
(明和元年 加増 400 文)
- 明和 7 年・文化 14 年・文政元年： 1 貫 950 文
- 天保 10 年： 1 貫 350 文
- 安政 6 年・元治元年： 1 貫 421 文
- 明治 3 年： 743 文 (7 石 4 斗 3 合)
- 明治 5 年： 6 石 (600 文)

⑧ 小閑家の知行受給のまとめ

- 主に土地を受給しているが、それだけでは不十分でその他の形態で知行を受けている。
- その他の形態とは……「扶持」「切符」「四季施」「扶持」など
- 知行地の由来…………「上地」など
- 知行地は小作人（作子）に耕作させている。
- 屋敷のつくりとして、裏庭には、畠や水車小屋などがあり、生活を支えている。
- 「加増」に関して
（御膳番相勤候御勤功仰立ヲ以宝曆十四年正月中御加増四百文被下置御番頭上之列ニ被成下）
- 天保 10 年に減給された事情は不明（財政がひっ迫か？）
- 明になると本人から役所に届を出す形式になる。また、土地所有の収入のみで、小閑家では減少していく。

⑨ 片倉家中の知行高（『白石市史』より）

区分 資料	片倉家臣団知行高積累表										（単位・貫文）
	10貫文以上	10~8	8~7	7~6	6~5	5~3	3~2	2~1	1貫文以下	計	
寛永 知行帳（武蔵文書）	4	3	(13.0) 4	0	22	(17.0) 43	—(40.0)— 51	50	(30.0) 75	252	
貞享 舞上（代々記）	4	4	(11.0) 5	4	12	(16.0) 45	—(62.0)— 64	90	(7.4) 18	246	
誠 庄 記	3	2	(4.0) 2	6	8	(1.6) 67	—(82.6)— 73	149	(40.0) 112	422	

（注）1、知行帳・書上は土以上を、雄旗記は土格、土以下も含む
 2、雄旗記は史料編所収「白石役人帳」と少し異同あり同書は天保頃のものか
 3、() は%を示す

- ・3貫文以下が多く、薄給であることがわかる。
- ・小閑家の知行高は、1貫350文から1貫950文の受給である。

5. 文化財の保存 「武家屋敷」の保存に尽力された片倉家当主と小閑家当主の著書から

『白石の家中屋敷一後小路・小閑家一』（片倉信光氏）から

「結 以上が小閑家むかしの姿を話によって復元して描いたものです。武家屋敷は小さいながら城郭と同じく防御戦斗を目算に入れて計画されたことがよく判るし、乏しい財政は、手織や菜園や樹種などや庭木等まで考慮して自給体制を整えたように見受けられる。陪臣の武士のつましやかな生活振りがしのばれる。このように貴重な文化財を破壊することなく今日まで保存してこられた小閑家に敬意を表すると共に一層困難となる今後の維持管理は各方面よりの強力な援助に待つ所多いことを広く訴えたい。」（1965.5.20）故人

（此の著書は1968『奥羽史談』第50号維新特集号16～21頁 奥羽史談会に掲載されている）

『ふるさとの古い家』（福島市万世町 小閑小児科医院 小閑英治氏）から

「以上が郷里白石の我が家の概況であるが、300年の風雨に耐え、又三陸大地震や仙台沖地震に於いても被害をうけることなく現在に至っている。この家の保存維持には多くの経費がかかるばかりではなく、茅葺屋根の材料の茅などを求めるのに困難な時代となり、地方文化財である武家屋敷の個人としての維持管理には、今後多く問題点がのことになるだろう。最後に、この古い家の維持管理に協力してくれた妹に感謝する。」（著述年月日不明）故人

おわりに

小閑家の文書に「知行宛行書」「水牒」「御知行田数覧」がセットになって保存されており、片倉家中中級武士と言われる家臣の知行受給の一端を理解する貴重な資料と思われる。

本冊子は、「片倉中小閑家文書調査会」を立ち上げ、立田基生（代表）、赤井畠柳二、小閑静子が編集し、2020年12月、小閑家現当主の小閑洋氏によって発行した。

「白石古文書の会」の皆様に翻刻や解説等の協力をいただいた。感謝申し上げます。

大正 11 年の宮小学校と小野さつき訓導の授業

—小野さつき訓導遺徳顕彰館所蔵資料から—

佐藤 洋一（蔵王町教育委員会）

大正 11 年（1922）7 月 7 日、宮村立宮尋常高等小学校（以下、宮小学校）尋常科 4 学年を担任していた小野さつき訓導が、白石川での野外写生の授業中に溺れる児童を救おうとして殉職した。この事件は当時の社会に美談として受け入れられ、全国から賞賛と同情が寄せられるに至った。

今年（令和 3 年）は、小野訓導の殉職から 99 年（100 年忌）を数える。この節目にあたり、蔵王町では地域住民の代表者による実行委員会を組織してさまざまな記念事業を催した。筆者は、これに向けて地域住民の『暖機運転』になればと数年前から小野訓導に関する資料調査を行い、その成果に基づく小展示や講演会などを実施してきた。資料調査は、宮小学校内に設置される小野さつき訓導遺徳顕彰館所蔵資料（以下、顕彰館資料）を中心に、宮城県公文書館所蔵文書、当時の新聞・雑誌などを対象として行ったものであるが、殉職事件に直接関係する事象だけでなく、その背景となる社会情勢とそれに基づく常識・倫理観、学校の状況、住民の意識などさまざまな知見を得ることができた。そうした知見の中から、小野訓導が在籍していた当時の宮小学校の状況と、小野訓導が実施していた授業のようすについて報告しようと思う。

大正 11 年の宮小学校

宮小学校は、明治 6 年（1873）6 月に開校した刈田郡宮村（現・蔵王町）立の小学校である。開校当初は第 7 大学区第 3 中学校区第 20 番小学校と呼称され、宮町内の三谷寺を学舎としていたが、後に宮町西側の現在地に移転した。大正 11 年当時は尋常科 6 学年、高等科 2 学年からなる尋常高等小学校として運営されていた。教員数は訓導（正規教員）6 名、代用教員 3 名の計 9 名（大正 11 年 4 月 1 日現在）であった。訓導のうち 1 名は校長なので、当時の宮小学校は 8 学年を 8 名の教員で運営していたことになる。

顕彰館資料の中に大正 11 年度の学校日誌がある（図 1）。行事、来客、郵便物、天候、気温などが記録されており、学校の状況を把握する上で極めて重要な資料である。日誌には在籍児童数や出欠者

数も記録されている。これに基づき、大正 11 年 4 月 4 日現在の児童数を記したのが表 1 である。当時、尋常科は義務教育、高等科は志願制だった。宮小学校の尋常科 1 学年の平均児童数は 69.5 人であった。当時、尋常科は 1 学級 60 人制とされていたが、主に財

図 1 学校日誌

課程	男子	女子	計
尋常科	213	204	417
高等科	53	21	74
計	266	225	491

表 1 宮小学校の児童数

2 大正 11 年の宮小学校と小野さつき訓導の授業

月日	行事・できごと	月日	行事・できごと
4 4	始業式、新任教師披露式、入学式	11 2	高等科児童、腸チフス感染。全校消毒
19	休業日（神明社春季祭典のため）	3	公欠児童 6 名（チフス 1 、濃厚接触 5 ）
25	全校児童・教員一同花見	12	運動会
5 9	早起き会	13	振替休業
11	展覧会鑑賞（尋 4 以上。白石市）	18	臨時休業（教員全員出張）
13	臨時休業（教育会で教員全員出張）	19	振替授業
27	海軍記念日（記念講話）	20	尋 4 ~ 高 1 修学旅行（飯坂日帰り）
31	入営者壮行行事	21	振替休業
6 3	大掃除（尋 3 以上）	23	祝日（新嘗祭）高 2 修学旅行（松島 2 泊 3 日）
5	農業休業（尋 3 以上。19 日まで 2 週間）	25	刈田郡品評会見学（尋 4 ~ 高 1 。白石）
12	農業実習（高等科）	12 5	教室に火鉢設置
19	始業（尋 3 以上）	15	青年団夜学会を開始（1 月 31 日まで）
7 3	校長、愛知方面へ視察出張（12 日まで）	28	終業式、成績発表、大掃除
6	全校児童・教員、白石川にて皇太子奉迎	29	冬季休業、青年団夜学会休講
7	小野さつき訓導殉職	1 1	1 月 1 日の式典挙行（役場職員、各委員）
8	全校児童に訓示（小野訓導殉職について）	5	青年団夜学会再開
13	通夜（教員全員宿直）	7	始業式
14	小野さつき訓導村葬	9	入営者壮行行事
16	青年団剣道大会（白石市）	29	教室の障子貼り直し（高等科児童）
30	小野訓導追悼会（蓮藏寺会場）	31	入営者壮行行事、青年団夜学会閉講式
31	終業式、成績発表、大掃除	2 11	祝日（紀元節）式典挙行（教員のみ）
8 1	夏季休業	14	臨時休業（故伏見宮国葬のため）
11	召集日（課題整理、大掃除）	16	短縮授業（旧正月のため）
21	召集日（課題整理、大掃除）	17	旧新年祭（尋 6 以上、神明社参拝）
9 1	始業式	24	教育会（算数科の研究授業）
7	処女会総会	3 1	短縮授業（旧正月 14 日祭典）
22	白石中学校絵画展に作品 26 点を出品	2	大講話会
10 5	青年団運動会（児童全員で見学）	3	青年団・処女会合同講話会
17	青年団講話（白石市講会堂）	10	陸軍記念日（講話）、卒業写真撮影
28	教育活動写真観覧	22	祝日（春季皇靈祭）
30	学制発布 60 年記念行事。陸軍部隊校庭宿營	24	終業式、成績発表、大掃除
31	祝日（天長節）全校で陸軍演習見学	25	修了式、卒業式、謝恩会

表 2 宮小学校の行事・できごと（大正 11 年度）

政的な事情からこれを果たせる自治体はほとんどなく、宮小学校でも平均値で 9.5 人超過していた。小野訓導が担任していた尋常科 4 学年は 66 人が在籍しており、新任教師であっても補助教員もなく、定数越えの児童をまとめなければならないという、現在の学校運営からは想像できないような状況であった。小野訓導の殉職にあたり、主に教育者側から「この事件は小野訓導に落ち度があるのでなく、教員の管理指導が十分に行き届かない現行制度のせいである。小野訓導は 60 人学級制の犠牲者である」といった意見が出された。この意見に社会世論も同調したことを見るに、60 人学級制は当時の社会でも問題視されていたことがわかる。

高等科は志願制であり、進学するか否かは本人の志望に加えて家庭の経済状態が影響した。宮小学校の場合、高等科 1 学年の平均児童数は 37 人で、進学率は 53.2% である。高等科の男女別在籍率は男子 71.6% に比して女子 28.4% と男子が大きく優勢である。他地域のデータとの対比や当時の社会通念を客観的に捉え直すなどの過程を経ていないため確証的ではないが、この差は、当時の宮村における男女の進学・学歴に対する一般的な考え方を反映したものと言えよう。

学校日誌の記載内容から、大正 11 年度の宮小学校の主な行事やできごとをまとめた（表 2）。実際の記載内容は格段に詳細だが、年間行事を中心に際立ったできごとを任意に抽出した。また、言うまでもないことであるが、この年度の宮小学校は小野さつき訓導殉職という未曾有の大事件の当事者でありそれに関連したできごとや来訪者が多く記されているが、ほぼ全て割愛した。

大正 11 年度の宮小学校は 3 学期制で、概ね 1 学期が 4 ~ 7 月、2 学期が 9 ~ 12 月、3 学期が 1 ~ 3 月に区分される。長期休業は夏季休業（8 月 1 ~ 31 日）、冬季休業（12 月 29 日 ~ 1 月 6 日）、春季休業（3 月 25 日 ~ 4 月 3 日頃）であるが、加えて尋常科 3 年以上には 2 週間の農業休業（6 月 5 ~ 18 日）が与えられる。最長の休業は夏季休業の 1 ヶ月間だが、10 日ごとに召集日が設定され、その都度宿題が出されたようで、児童らが勉強から逃れることはできなかったようである。

学校行事としては、花見、展覧会見学、活動写真観覧、運動会などがあった。尋常科 6 年生と高等科 2 年生に対する卒業写真撮影も行われており、いわゆる『卒業アルバム』に相当する記念品が当地域でも一般化していたことがわかる。特筆すべきは修学旅行で、尋常科 4 年～高等科 1 年は福島県飯坂まで日帰り、高等科 2 年は松島まで 2 泊 3 日という形で実施していた。現在の小学校で行われる行事の多くが 100 年前にはすでに実施されていたことがわかる。

注意を惹くのが、青年団や処女会の活動が学校のできごととして記録されていることである。単に学校が若者組織の活動の場として利用されていたのでなく、教員が彼らの活動を指導・共催していくことが看取され、当時の小学校が、在校生のみならず広範囲な地域住民に対して学習機会を提供する拠点の役割を担っていたことがわかる。

陸海軍記念日や出征者の壮行会、軍事演習の見学など、学校において軍事関連行事を実施していたことも目に付く。10 月 30 日には移動中の陸軍部隊（日誌には「軍馬 30 頭砲 2 門」とある）が校庭に宿営しており、学校（ひいては児童たち）と軍事との距離感が現代とは随分異なっていたことが窺える。当時の我が国は明治維新以来国際的な地位の向上を図り、ついに列強国に數えられるまでになっていたが、その国際的地位を入手するにあたり日清・日露戦争、第一次世界大戦などの軍事的活

動が果たした役割は大きかった。世界情勢は霸権主義・帝国主義が主流で、軍事は国家の権益を守り拡大するため肯定的に用いられていた。また、我が国では徴兵制を採用しており、地域住民の目線では『近所のお兄さんが兵隊になる』のが当たり前であった。なればこそ、当時の人々にとって軍事は身近なものであり肯定的なもの—『正義』と言い換えてもよい—だったのであろう。当時の学校教育現場においては、軍事を遠ざける理由はまったく存在しなかったと言ってよかろう。

小野さつき訓導の授業

小野訓導は大正 11 年度の宮小学校尋常科 4 年の担任であり、66 人の児童に対して各教科を教授し指導を行っていた。小野訓導と児童との関係は良好であったが、ここではそういった方面については言及せず、小野訓導が行った授業の内容と、そこから見えてくる彼女の指導方針について述べたいと思う。

頭彰館資料の中に、小野訓導が作成した『小学校教授目録 其ノ一』という資料がある（図 2）。週ごとに何を目的としてどのような指導を行うのかを記したもので、現代の教育現場でも『週案』として広く行われている授業の設計案である。本来、週案は教員が個人的に作成する補助資料であり、所有権は教員に帰属するため学校に残されることはない。しかし、小野訓導の場合は遺徳頭彰という特殊事情により現在まで公的所管されるに至っている。100 年前の学校教育の現状を把握する上できわめて貴重な資料といえる。

曜日	授業科目					
	月	火	水	木	金	土
1校時	修身	読み方	読み方	修身	読み方	算術
2校時	読み方	体操	算術	算術	算術	綴り方
3校時	理科	算術	体操	読み方	体操	読み方
4校時	珠算	綴り方	理科	書き方	図画	書き方
昼食	昼食					—
5校時	書き方	裁縫	唱歌	裁縫	手工	—

図 2 小学校教授目録

本資料の表紙裏には、小野訓導が担任した尋常科 4 年の『時間割』が記されている（表 3）。これによると、当時の宮小学校尋常科 4 年生は週 5 日登校で日曜日は休業、月～金曜は昼食（各自持参）をはさむ 5 校時、土曜は午前授業であったことがわかる。授業科目は修身、国語系 3 科目（読み方・書き方・綴り方）、算数系 2 科目（算術、珠算）、理科、体操、唱歌、図工系 2 科目（図画、手工）、裁縫の 12 科目に分れている。国語系科目のうち、読み方は現在の国語・社会科に相当する。書き方は文字の書き方、綴り方は作文を学ぶ科目である。図工系 2 科目は、現在は図画工作とひとまとめにされているが、当時は図画と手工とに区別されていた。

図画は、小野訓導殉職のきっかけとなった科目である。

表 3 宮小学校尋常科 4 年の時間割

「図説 教科書のあゆみ」(1971・日本私学教育研究所刊)によると、大正11年当時の図画は、教科書に掲載されている手本を見て同じように描く『臨画』主体の教科だったという。現在一般的な『感動を表現する芸術活動』を学ぶための教科でなく、手本を理想とし近付くための訓練という意味では『習字』に近い教科だったと言えよう。当時の教科書に掲載された手本(図3)を見ると、現在の美術教育とは大きく異なる目的的科目(故に学ぶ題材も大きく異なる)

だったことが窺えるが、同時に「小野訓導はなぜ野外写生を行ったのか?」という大きな疑問も浮かんでくる。当時の図画は『臨画』を学ぶ科目であり、手本はすべて教科書の中に存在している。野外写生など行う必要はなく、すべて教室の中で完結するはずである。

表4は、教授目録から抽出した小野訓導の図画の授業内容及び目的である。7月7日の殉職まで14回の授業機会があり7回実施しているが、その内容は驚くべきものである。初回から自然物写生、2回目からは一貫して野外写生を計画している。指導方針も「主観に重きを置く」「自己を見出させる」「自由に思う存分描かせたい」など、およそ臨画を意識しているとは思えず、図画という教科に対する概念自体が異なつていたと断ぜざるを得ない。

小野訓導が教師となった大正10年代は、「自由画教育」が浸透し始めた時期である。自由画教育とは農民芸術家・山本鼎によって提唱された、児童が自らの感性や情動に基づいて自由に絵を描くことを追求する美術教育のあり方であり、手習い的な臨画教育とは一線を画する。山本は「図画教育は美術教育であり、美術教育は自由画教育であるべき」として大正8年に日本

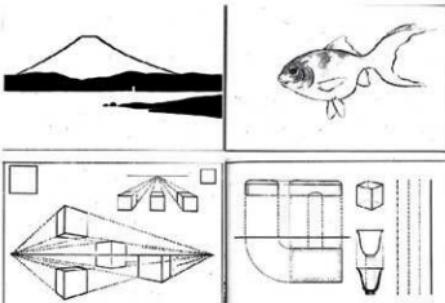


図3 当時の『図画』教科書の内容

週	月日	内容	指導方針・特記事項
1	4/7	自然物写生	児童場所選択。主觀に重きを置いた製作をさせる
2	4/14	野外写生	児童題材選択。客觀物を通じて自己を見出させる
3	4/20	野外写生	児童題材選択。的確に自然物を見る習慣を養う
4	4/28	野外写生	自然物を自由に思う存分に描かせたい
		鑑賞授業	前時に創作したものを鑑賞し、鑑賞眼を養う
5	5/5	野外写生	※不実施(理由不明)
6	5/12		※尋常4年以上は臨時休業
7	5/19	野外写生	※不実施(理由不明)
8	5/26	野外写生	※不実施(理由不明)
9	6/2		※大掃除のため授業なし
10	6/9		※農繁休業
11	6/16		※農繁休業
12	6/23	写生	
13	6/30	鑑賞授業	前時に創作したものを鑑賞し、鑑賞眼を養う
14	7/7	野外写生	児童場所選択。写生

表4 小野訓導の『図画』授業の計画

自由画協会を設立。長野県で第 1 回児童自由画展覧会を開催した。展覧会には 9,800 作もの応募があり、自由画教育が大きな反響を以て受け入れられつつあることが示された。大正 9 年に東京、京都、大阪、九州で開催した児童画展覧会では多くの教育関係者が山本の考えに賛同し、草の根的な取組として自由画教育が学校の授業に活かされるようになった。大正 10 年、宮城県初の児童自由画展が宮城県女子師範学校で開催された。小野訓導は同校 3 学年に籍を置いていた。卒業後的小野訓導の図画教育のあり方を見るに、この時期に自由画教育に大きく影響を受けたことは想像に難くない。

唱歌の科目について「図説教科書のあゆみ」によると、我が国における音楽教育は教師も養成されておらず普及が遅れ、実際に授業が行われるようになったのは明治 30 年代のことという。偉人の逸話や伝記を題材とした徳目唱歌や国の成り立ちに関係した祝日祭日唱歌をはじめ、軍歌や鉄道唱歌などが題材とされたそうである。

小野訓導の教授目録によると、殉職までに唱歌は 14 回の授業機会があり 11 回実施した(表 5)。十五夜お月さん、りすりす、コサック騎兵の歌、

週	月日	内容	指導方針・特記事項
1	4/5	前年習った歌	歌いたいという気分をおこさせたい
2	4/12	十五夜お月さん	歌うことで児童に癒す感じを起させたい
3	4/19		※祭典につき休業
4	4/26	りすりす	歌いたいという気持ちになるまで誘導する
5	5/3	りすりす	感想発表させる
6	5/10	十五夜お月さん	
7	5/17	十五夜お月さん	復習。一人で歌えるまで誘導する
8	5/24		実施
9	5/31		※不実施(理由不明)
10	6/7		※農繁休業
11	6/14		※農繁休業
12	6/21	コサック騎兵の歌	『赤い鳥、小鳥』の復習
13	6/28	コサック騎兵の歌	復習
14	7/5	月見草	おぼろげながら歌い得るよう誘導する

表 5 小野訓導の『唱歌』授業の計画

赤い鳥小鳥、月見草などの曲目がみえる。これらは従来の唱歌ではなく『童謡』に属するものである。

童謡とは、「詩や文学を通じて子どもの豊かな感性や芸術性を育てる」ことを提唱した詩人・鈴木三重吉が、大正 7 年に児童文学雑誌『赤い鳥』を出版したことから始まる。当初は詩のみだったが、大正 8 年、作曲家・成田為三が童謡詩『かなりや』に曲を付し、子どもが自然に口ずさめる『歌としての童謡』が誕生。以後、多くの詩人と作曲家により数々の童謡が作られることになった。

小野訓導は、誕生したばかりの童謡を積極的に授業に取り入れたのである。そこには、図画の授業で自由画教育を実践したとの同様、芸術系教科に対する従来の教条的、規範的な気風を改め、児童が学ぶことを楽しみ、自由な感性や芸術性の開花を導き出したいという小野訓導の『願い』が込められていたものと思われる。また、一介の新任教師に過ぎない小野訓導の授業においてこうした先進的な(おまけに、國の方針に基づかない)取組が行われていたということは、これが小野訓導一人の成せる事柄ではなく宮小学校教員の総意に基づく組織的な取組であり、さらには児童の保護者をはじめとした宮村民も了解・容認していたことが看取されるのである。

風船爆弾になった和紙

—福島県上川崎産和紙—

安斎 克仁（和紙の里紙漉き小屋の会）

1.はじめに 上川崎地域の概略

上川崎村（現在二本松市）は、一千年以上の歴史ある手漉き和紙の産地。起源は平安の中期、冷泉天皇（967～969年）の時代に漉きはじめ「みちのく紙」と称され、紫式部や清少納言たちに愛でられた「真弓紙」はここで漉かれたと言われている。

○二本松藩政時代（丹羽藩主）奨励。明治中期から紙の需要が急激に伸び、販路拡大、手漉き和紙は飛躍的な振興。「文書用紙」「戸障子紙」に使用された。

○和紙製造工場（紙漉戸数）昭和15年上川崎村には、293戸あったが、戦争中は公表されなかった。

○東野辺薰氏の著作『和紙』は第18回芥川賞受賞。昭和18年9月『東北文学』1号に掲載、昭和19年『文藝春秋』3月号に転載される。『和紙』は上川崎の紙漉き集落を舞台に書かれていて、この中に「軍需紙」「軍用紙」として供出の割り当てがあったことが記されている。

○戦時中、福島県手漉和紙工業組合、昭和15年設立認可、昭和18年末、現在所に組合事務所。紙漉資材、薬剤など組合を通さねば入手出来なかった。

2.「軍用紙」の生産割当（和紙の供出）

宮城県船岡海軍火薬支庁から、組合に「軍用紙」の供出割り当てが来て、船岡海軍火薬支庁へ納入した。福島県へ大判紙（60×90cm）の供出割り当て50万枚、うち上川崎村40万枚である。

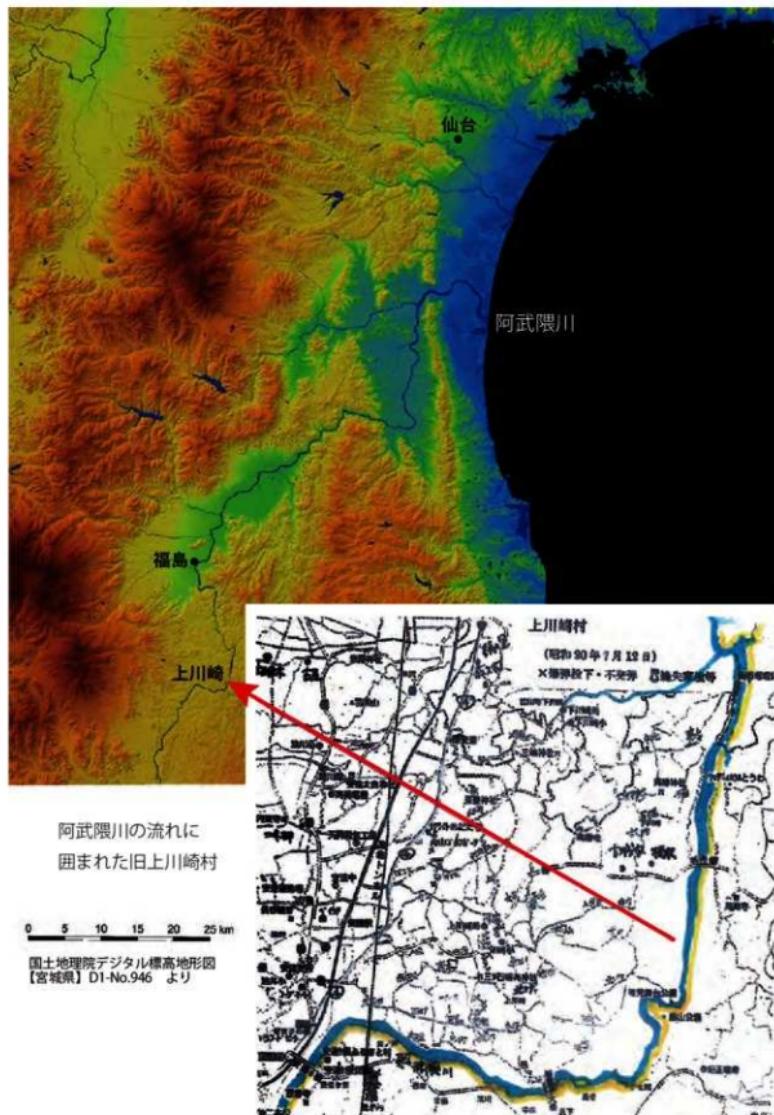
○細川紙とは、大判の堵紙で元は紀伊國細川村の産。細川紙で俗に「二・三判」という丸紙紙の大きさが縦2尺、横3尺で、丸紙とは紙の周囲を裁断しない漉いたままのものを指す。軍用紙1枚の目方5~6匁、単価6銭5厘、漉きっぱなし、100枚毎に仕切り紙を入れ、2,500枚を1束として包装、大判のまま梱包。紙質は堵80%、パルプ20%、重量1,000枚、5貫100匁、（約19.1キロ）と規定。



写真1 上川崎字咲田最初の臨時事務所（現存）



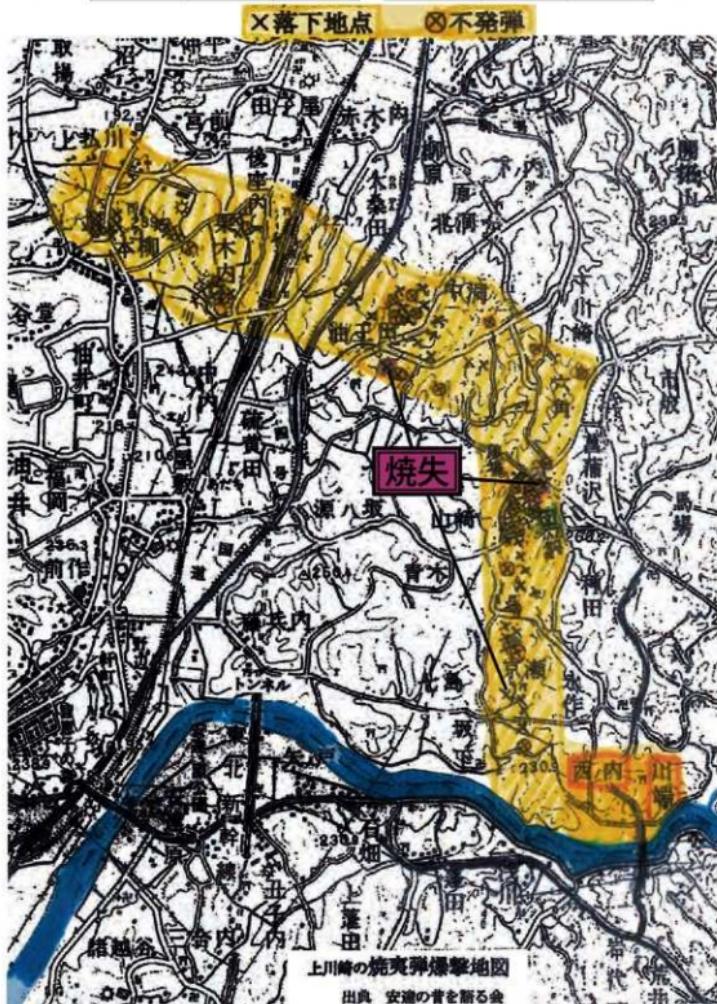
写真2 昭和18年新築向原の組合事務所（現存）



第1図 福島県二本松市 上川崎の位置

3. 上川崎村・渋川村の空襲〔焼夷弾爆撃地図〕

	投下個数	不発弾		投下個数	不発弾
上川崎地内	49	15	渋川地内	46	9



第2図 上川崎の焼夷弾爆撃地図

◎思い出す記憶のままに

私は、上川崎国民学校3年生でした。

昭和20年(1945)7月12日、にわか雨の強く降る深夜、突然飛んできた飛行機が、最初に照明弾を投下したのです。その後爆撃機が低空で、あちらこちらに散らばっている農家を狙って焼夷弾を投下したのです。低空から投下されたため、田や畑・雑木林などあちらこちらに不発弾となり、いっぱい転がっていました。都会の様に家並が続き固まっているわけではなく、離れている一戸一戸の農家を狙い撃ちにしているのです。全焼農家2戸、ボヤ2戸で人身・死傷者の被害者がなかったので、内密に処理されたからだと思います。上川崎小学校のすぐ後ろ、陣場の古川勘助さんの家の全焼でした。

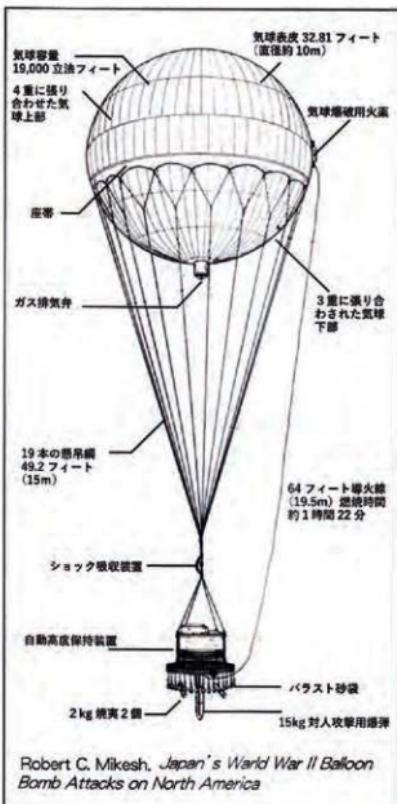
中洞の安齋卯工門さんの所は納屋と家の間に焼夷弾が落ちて破裂し火の油が周りに飛散し全焼でした。その他にも落ちた焼夷弾は、降る雨にも消えず、田や堀を「火の川」となって流れるのを恐る恐る眺めていたと同級生は語っていました。油脂焼夷弾だったので、飛び跳ねた火の油が藁ぶき屋根に燃え移り消せなかったということでした。後日、学校の授業が終わってから同級生の案内で、不発弾の落ちている山に見に行ったのを覚えています。雑木林の中に、ジュラルミンのびかびか光る丸い細長い物体は、1.5m位、重さも60kg以上もありそうでした。途中の田や畑に落とされた弾痕が点々とあり特に泥田は「蟻地獄」の様な大きなすり鉢穴になり何ヶ所も出来ていました。その後2年位は水溜りになっていた。昭和20年頃以前、水苗代の種蒔きは「五月の八十八夜過ぎ」でした。(早いと水が冷たく糞が腐ってしまうから)田植えが始まるのはひと月後の6月になってからで、7月になつてもまだ植えたばかりの所もありました。今は温室で育苗するので5月早々から植え始まります。私の姉は、二本松の高等女学校に通う朝、京瀬向いの道の土手草が、ぼかぼかと燃えている傍をビクビクしながら通って行ったそうです。坂ノ下の同級生の兄さんは、焼夷弾の破片で指を怪我して医者に掛かりました。また、つい5年ほど前ある家の土蔵の奥の棚に仕舞わされていた焼夷弾を古物商に発見・通報され、近隣四方の道路を通行止めにして、自衛隊により処理されましたが、焼夷弾の信管を取り外し中の油脂は抜き取り、お風呂の燃料に、遠の昔に使ってしまったとのことでした。

『上川崎村は、南から流れる阿武隈川が東へ蛇行するその北側なのです。千年の紙漉きの歴史を持つ和紙づくりの「川ノ端」部落は発祥の地と言われ、日当たりのよい南面に家が並びます。』(地図参照)
 爆弾の投下目標地点は、川ノ端、西ノ内部落が爆弾投下の目標地点だったと思われ、阿武隈川を越えた、西方100mあたりが坂ノ下、京瀬部落なのです。終戦近くには、空襲爆撃が普通に連日、全国各地に及んで米軍機動隊の艦載機による一寒村の夜襲など、問題ではなかったのでしょうか。当時B29とは、高いところばかりを飛ぶものと思っていたので、爆撃機があまりにも低空飛行だったので、B29によるものとは、思えなかった。もう75年の昔になった今、当時と考え併せてみると、「江戸東京博物館の展示資料」の解説やTBSテレビで放送された「女学生が作った風船爆弾」のことなど、アメリカから公開された戦争当時の詳細資料などを見て、わが村の焼夷弾爆撃は、何故行われたのか、そうだったのかと理解できる気がするのです。

『戦争被害者とばかり思っていたのが、知らぬ間に加害者の立場になっていたのかも知れません。』

◎「ふ号作戦」須賀川市史から

風船爆弾作り第一工程作業、和紙のコンニャク糊塗加工作業（須賀川町第一国民学校高等科生徒男女150名動員）。須賀川養蚕組合の乾糞所には、乾燥設備があった。コンニャク糊の粘潤物質を刷毛で七回塗る、作られた半製品は、日産100枚前後で東京に輸送され日比谷の東宝劇場や日本劇場で風船に仕上げられた。機密保持のため「上川崎」で漉かれた和紙が使用されたとは、知らされても書かれてもいい。全国の和紙製造業が動員され、全国の巷からはコンニャクが姿を消した。数千人及び女子学生が動員され、国技館を始め多くの大劇場が接收され、この気球に狂奔した。



第3図 大日本帝国陸軍の風船爆弾の仕組み

櫻井誠子 2007『風船爆弾秘話』から引用
(元図: Smithsonian Institution National Air and Space Museum の風船爆弾展示パネル)

◎気球部隊「江戸東京博物館」の展示資料

によると昭和19年11月から飛ばし始め、11月700個、12月1,200個、20年1月2,000個、2月2,500個、3月、4月までに計9,300個放球されたとあります。

気球の直径10M、ゴンドラの吊紐15m、ガスバルブ直径40cm、総重量205kg、

搭載爆弾量 爆弾15kg、焼夷弾5kg 2個～4個

◎連隊本部 茨城県大津(五浦) いづら 2,000名

第一大隊(3個中隊) 茨城五浦 18放球台

第二大隊(2個中隊) 千葉一宮 12放球台

第三大隊(2個中隊) 福島勿来 12放球台

発射台合計 42台



写真3 わすれじ 平和の碑

(風船爆弾放流基地の碑)
昭和59年11月25日建立
北茨城市五浦、長浜海岸

4. 何故、上川崎村は爆撃されたのか？

- ①誤爆説……………福島市街地
- ②北芝電機……………高圧電線が通っているので
- ③紙漉き村……………昔からの紙漉き村（県手漉き和紙工業組合）？
- ④風船爆弾との関連……………軍需産業？「和紙」

アメリカの発表は、終戦 28 年後の昭和 48 年になってから、風船爆弾の被害があったこと。

国立国会図書館（憲政資料室）収集の米国国立公文書館所蔵文書の中から、爆撃軍団記録、米軍作戦任務報告書、昭和 20 年（1945）7 月 12 日深夜の空襲爆撃、

Unknown（爆撃地不明とされている爆撃機）

5. 和紙の里紙漉き小屋の会の活動

- ①上川崎に「和紙の里の碑」「東野辺薰文学碑」を建立する。（令和 4 年 1 月除幕式予定）
- ②『風船爆弾になった和紙』冊子の出版発行。（令和 3 年 6 月）
- ③上川崎和紙にまつわる写真展開催予定。
- ④市民との共同による地域づくり。



千年の伝統を受け継いだ手漉き和紙の里、「一本
おき」と川崎で販売が始められたのは、今から三
〇六年（明治 26 年）の時代。阿武隈川のほと
りの川の沿岸で手漉き紙が作られており、
昭和三十年代頃まで上川崎全町で盛んに紙漉き
が行われておりました。
「和紙」の作家東野辺薰氏は、小学
校時代を上川崎で過ごし、心豊かな文章で「和
紙」を仕上げておられます。
このたび東野辺薰氏没後六十周年を記念するにあ
たり、和紙の里川崎を後世に伝えるとともに、
東野辺薰氏を顕彰するため本碑を建立するもの
であります。

令和三年十月廿日
和紙の里
紙漉き小屋の会

東野辺薰「和紙」より

東野辺薰文学碑

冬のさ中には水と闘ふ、過酷な寒氣
への苦行に近い忍耐がない限り、
所謂村の人々には手の出ない仕事
になるのではないか？
上川崎の人々には冬の征服者として
の血が長い傳統を承け継いで流れ
てゐる。誇りを以て友人とはさう考へ
てゐるのであつた。

第 4 図 和紙の里の碑（2022 年 1 月 20 日開碑予定）・東野辺薰文学碑



① ねり混入



② まぐわ作業



③ 算げた梳き揚げ



④ 梳き揚げ

写真4 上川崎の紙漉き風景（2016年2月8日）

6.まとめ

福島県手漉和紙工業組合に、軍用紙の生産供出割当てが命じられたのは、昭和16年のこと。枚数は50万枚で、宮城県船岡海軍火薬支廠発注であった。紙の大きさは60cm×90cmの大きさで重さは1枚5～6匁、(そのうち上川崎は、40万枚を納めた)。風船爆弾のことをアメリカで初めて発表したのは、30年近くも経った昭和48年(1973)の事でアメリカに到着、確認されたものは約300個であった。

戦時中、供出させられた和紙は、何に使われたか判らなかった。が、軍需用品の和紙は風船爆弾に使われたことがわかった。

「和紙」と「風船爆弾」と「上川崎の空襲爆撃」は一連の繋がりが感じられてならない。

◎風船爆弾の放球基地 ○福島県勿来町 ○茨城県大津町五浦(本部) ○千葉県一宮町

◎紙漉き村(上川崎村)の爆撃 昭和12年7月12日深夜(11時過ぎ)

◎同じ一宮(名古屋の隣町の一宮市を上川崎村と同日、同時刻に空襲爆撃)



①気球とゴンドラ

②吊り下げられたバラスト砂袋

写真5 復元された風船爆弾（江戸東京博物館）

引用・参考文献一覧

- 1.『安達町史』昭和51年12月発行
- 2.『二本松市史』昭和52年2月発行
- 3.「本土大空襲」「図説福島県史」昭和47年6月5日、県図書印刷
- 4.「第6節 乾蘭所と風船爆弾」「須賀川市史」現代2、P.133、昭和47年3月1日
5. 国立国会図書館蔵資料室収集「米国国立公文書館所蔵文書」平成28年4月4日利レ個37号
6. 「風船爆弾」フリー百科事典ウィキペディア 2015年3月15日版
7. 歴史春秋社『福島の戦争と人間』2001年5月15日
8. 「戦跡を訪ねて」『学士会会報』第736号、昭和52年7月1日
9. 栗城正義 2001『福島と紙の話』歴史春秋出版社、2001年7月15日刊行
10. 櫻井誠子 2007『風船爆弾秘話』光人社
11. TBSテレビ報道特集NEXT 2008年8月23日放送「さくら映画」
12. 「風船爆弾 ふるさと今昔」「一宮町郷土史」(千葉県)平成20年
13. 安達の里の昔を語る会「月例会資料 上川崎の焼夷弾爆撃地図」平成19年8月
14. 藤原義一 2013「土佐和紙の歴史一断面：高知県でのアメリカ空爆用の風船爆弾気球づくり」「高知短期大学学生論集」第15号所収
15. 安斎保夫・安斎宗司 1979『ふくしまの和紙』歴史春秋社 昭和54年12月20日発行
16. 江戸東京博物館「展示資料」平成7年9月
17. 「福島県内の空襲警報」「福島県民百科」福島民友社 昭和55年5月20日発行
18. 「第4章 恐慌戦時体制下 郡は爆撃」「本宮町史」P.747、2004年4月12日

震災復興の10年

—宮城県山元町から—

田代 侃(山元町震災復興 土曜日の会)

1.はじめに

東日本大震災が起きた2011年3月11日から早くも10年を過ぎた。山元町震災復興計画は8年間、2019年で終わり、今も続いている付随工事も今年度でほぼ終了する見込みである。社会インフラや居住施設が復旧したからといって震災復興が終わったわけではない。震災の多様な爪痕は深く残り、社会環境、自然環境の修復再生には長期間を要することだろう。

少子高齢化、人口減少の中での復興は困難である。震災後の若年層の町外流出により、山元町の人口は震災前16,704人であったが、今や11,956人に減少した。その結果として山元町は過疎自治体の指定を受けている。自然環境については防潮林が植林され、海浜の生態系が再生しつつあるものの、集落の屋敷林と農地の境界林は失われたまま再生の見込みはなく、里浜の風景は変わってしまった。

震災の被害と復興には、その地域の地理、地誌が深く関わっている。この発表では山元町における遺跡発掘を含めて大津波の伝承に焦点をあてて考察する。

表1 山元町の地震・津波の概要と被害状況^{＊1}

地震の概要		被災状況	
発生日時	平成23年3月11日（金） 14時46分頃	〔人的被害〕	●死亡者数：637人（遺体未発見の死亡届17人および震災関連死20人含む） 当時人口（16,695人）の約4%
震源	三陸沖（牡鹿半島の東南東130km付近）	●避難者数：5,826人	
規模	マグニチュード9.0	●避難所数：19カ所	
震度	山元町震度6強	〔家屋被害〕	
津波の概要		●住宅4,440棟に被害 被害の内訳 全壊2,217棟（うち流出1,013棟）（50%） 大規模半壊534棟（12%） 半壊551棟（12.4%） 一部損壊1,138棟（25.6%）	
津波襲来	3月11日15時50分頃	〔産業関係への被害〕	
最大波	12.2m（磯浜海水浴場付近）	●農地面積の約59%（1,416ha）に浸水	
浸水範囲	24km ² （総面積の37.2%） 海岸沿い6行政区の全域および丘通 り4行政区の一部が津波により水没	●水田の69%、畑地の45%が冠水	
推定浸水域にかかる人口	8,990人（当時人口の53.8%）	●いちご農家被災件数 125／129戸	
推定浸水域にかかる世帯数	2,913世帯（当時世帯数の52.4%）		

2. 山元町の津波被害と復興

(1) 津波被害の概要

山元町の地震・津波の概要と被害状況を表1に示す。その他に物的被害として、電気、水道、通信、交通、公共施設、商業施設などがあり、生活基盤のすべてが失われた。また、計数できない被害として、コミュニティ、無形文化財、自然環境などの損失も甚大だった。津波浸水範囲は図2に示した。

(2) 震災復興の概要

震災復興は国土強靭化、内陸移転、コンパクトシティを基本方針として行われた。山元町震災復興計画の要点は図1の土地利用計画として示される。震災後10年にして、防潮堤と2線堤の造成、常磐自動車道の開通、JR常磐線の内陸移転、防災集団移転による新市街地の形成などの膨大な事業はほぼ終了し、ソフト面の生活環境は未だ復興途上である。そして、自然環境は津波に加えて復興工事によって破壊され、その再生は自然のリジリエンスに委ねられている。



図1 山元町土地利用計画^{*2}

3. 山元町の津波伝承

東日本大震災・大津波による物的被害はいずれ回復するだろう。しかし、人的被害は決して取り戻すことができない。山元町の津波浸水域の人口 8,990 人に対し、死者 637 人はあまりにも多い。避難者 5,826 人の大部分は津波に遭って、かろうじて助かった人数であり、津波襲来前に避難した人はごく少数であった。つまり、津波浸水域にいた住民の大部分は津波を見てから逃げ、津波に呑まれて救助された。地震から津波襲来まで 60 分の時間があった。地震 15 分後には大津波警報と避難指示が発令されていた。それでも住民は避難を開始しなかったのである。なぜ住民はすぐに避難しなかったのだろうか。震災後、住民は異口同音に、「津波が来るとは思わなかった」、「こんな大津波は知らない」と言うのである。過去の津波伝承が正しく理解されていなかった結果である。しかしながら、住民が愚かだったわけではない。気象庁でさえ大津波警報での仙台湾岸の予想津波高さは 3 m 以上としていた。これが当時の津波認識のレベルであった。500 年、1000 年といった再来周期の大津波に対しては、財産は捨てて逃げるに如くはない。しかし、住民は防災教育や避難訓練だけでは避難できなかった。早期避難して人命を守るために、過去の大津波を確実に伝承し、さらに未来へと伝える必要がある。

(1) 過去からの津波伝承

住民にとって他地域の津波伝承はよそ事であり、山元町には大津波が来ないと思い込んでいた。早期避難のためにには地元の民間での津波伝承が大切である。残念ながら、住民は 400 年前の慶長津波、1000 年前の貞觀津波を伝承していなかった。次に山元町の津波伝承を列挙する。

①民話：「追越の堤」「マンゼロク」：伝承者庄司アイ（山元町民話の会）

東日本大震災前に語られることはまれで、収録もされていない。

②記録：『山元町誌』*3：明治三陸津波、昭和三陸津波の記録

『山元町誌』第二巻、『山元町誌』第三巻には収録されていない。

③石碑：「中浜の津波石碑」「磯の津波石碑」

朝日新聞社によって三陸全域に設置された明治三陸津波、昭和三陸津波の記録。

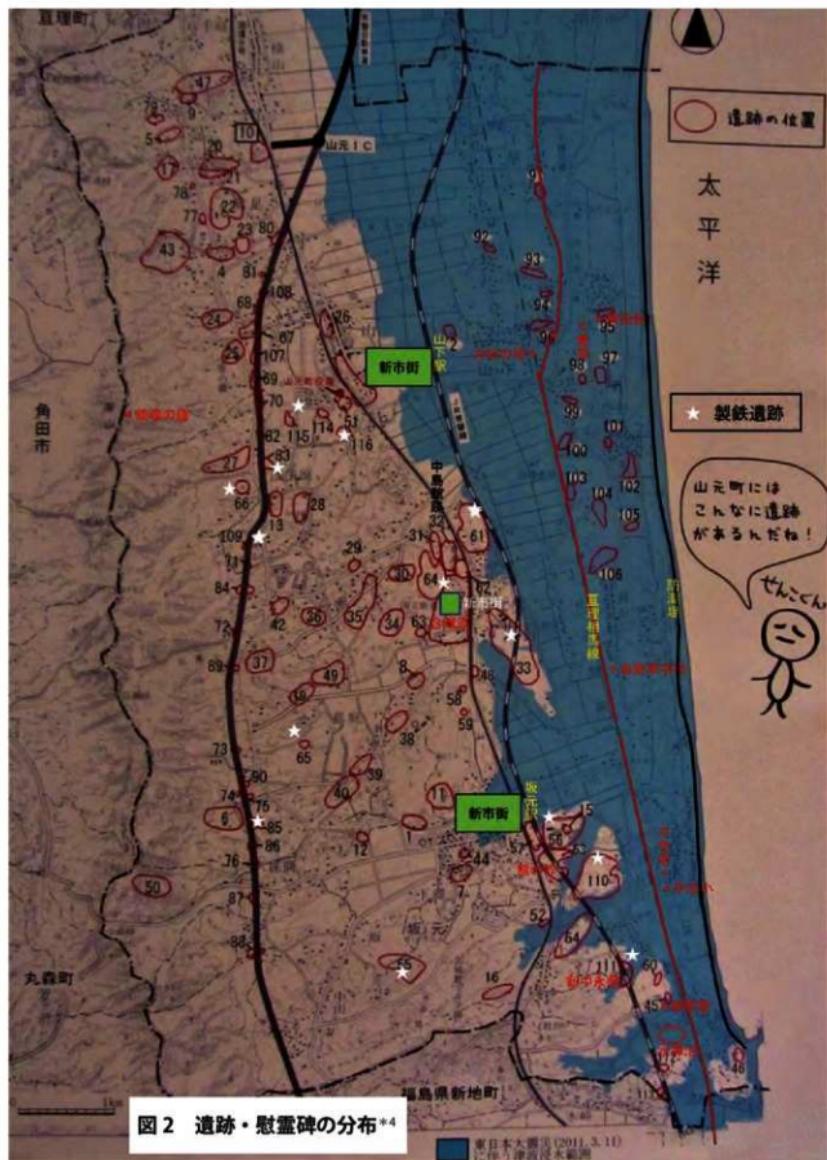
(2) 未来への津波伝承

2011.3.11 東日本大震災後の 10 年間に津波を記憶、記録した多種多数の情報や造作物が作られた。これらの津波伝承の媒体は時の流れとともに、忘却、風化、埋没、消滅して行く。果たして 500 年後、1000 年後にどれだけ伝承されているだろうか。東日本大震の津波経験を遠い未来へ伝承するために絶えざる努力が必要となる。未来への津波伝承の媒体として主要なものを列挙する。慰靈碑と遺構の位置は図 2 に示す。

①語り部：「やまともと民話の会」「震災語り部の会」

②紙情報：『山元町震災記録誌希望と笑顔が輝くまちへ』

『山元町震災復興記録誌復興の歩み』



『改訂増補民話』やまとと民話の会
 『小さな町を呑み込んだ巨大津波』やまとと民話の会、小学館
 『震災と民話未来へ語り継ぐために』石井正己、三弥井書店
 『南三陸・仙台湾地域のジオツアーガイド』南三陸海岸ジオパーク準備委員会

③電子情報：「公的機関のサイト」「民間団体のサイト」「個人のサイト」

④慰靈碑：「山元町慰靈碑大地の塔」「磯地区慰靈碑」「中浜地区慰靈碑千年塔」

「清和会慰靈碑」「山元自動車学校慰靈碑」「深山鎮魂の鐘」「普門寺骨塚」

⑤遺構：「中浜小学校」「水神沼」

4. 山元町の遺跡発掘

山元町の全域に多数の遺跡が分布し、縄文時代から現代に至るまで、この地域の繁栄を物語っている。良好な自然環境は住民の誇りであり、そこでの平穏な生活は想像さえしなかった巨大津波に呑み込まれ、住民は仮設住宅での生活に沈んでいた。そのような状況のもとで、膨大なインフラ復興工事にともなう緊急発掘調査によって出土した新たな遺跡に住民の关心が集まった。古代の高度な文化遺産の発見は嬉しい驚きであり、また発掘調査により復興工事が遅れないかと心配でもあった。そして、貴重な文化遺産が復興工事によって失われたことが残念だった。その代表的な遺跡の写真をGoogleEarthで示す。

①合戦原遺跡^{*5}

遺跡の位置は図2に示す。この場所は合戦原地区と呼ばれ、防災集団移転の新市街地になった。広い工事範囲から横穴墓群、古墳群、製鉄炉、木炭窯が出土し、多くの副葬品も発見された。中でも7～8世紀の38号横穴墓から発見された線刻壁画は注目された。この横穴墓は現地保存が検討されたが、様々な困難があり、残念ながら線刻壁画は取り出して保存されることになった。現在、取り出された線刻壁画は山元町の宝として歴史民俗資料館の目玉展示になっている。遺跡の一部は遺跡公園として保存されている。



②新中永窯遺跡⁵

遺跡の位置は図2に示す。この場所はJR常磐線の内陸移転にともなって発掘調査が行われた。製鉄炉、木炭窯、焼物窯、鍛冶・ろくろ工房、住居集落がセットになって発掘された。中でも大規模な製鉄炉には目を見張った。ここには高度な技術を持った窯業の専門集団があり、高品質の鉄製品や焼物を大量に生産していたことが想像できる。⁶ 双葉郡から山元町の辺りは、古代日本における鉄製産の第二の核心地区であった⁷ ということも納得できる。現在、この場所は線路の切り開きになっている。

**③熊の作遺跡⁵**

遺跡の位置は図2に示す。この場所はJR常磐線の内陸移転にともなって発掘調査が行われた。郡官衛跡、木簡、津波堆積物が出土した。郡官衛は亘理町だと思っていたので、山元町にあったことに驚いた。木簡からは年代の確定や製鉄との関連が解読された。津波堆積物は貞観津波のものであり、「日本三代実録」の記述が過大でないことを裏付けているそうだ⁷。このような熊の作遺跡は山元町の古代製鉄の姿や津波伝承として大切な遺跡であるが保存はかなわず、現在は鉄道の切り開きとなっている。



④水神沼津波遺跡^{*8}

水神沼の位置は図2に示す。水神沼は絶好の地形にあり、有史前からの津波堆積物が保存されている。2006年には産総研の調査によって貞觀津波堆積物が解明された。東日本大震災後の新たな津波堆積物が確認されている。民話や古文書による津波伝承について、水神沼の津波堆積物は大事な物証である。



5. おわりに

遠い昔の大津波を伝承することは極めて難しい。優れた民話収集とその語り部であった庄司アイさんは、「大津波の民話を現実として理解できていなかった」と悔やんでいた。水神沼の津波堆積物は2006年に調査が行われ、貞觀津波の規模がわかつていたのに、2011年東日本大震災の防災には間に合わなかつた。山元町だけで637人の犠牲者が出了ことは残念でならない。

震災後の発掘調査によって横穴墓の線刻壁画、古代製鉄遺跡、郡官衙跡と貞觀津波跡が出土した。これらの遺跡は、震災後の喪失感の中で郷土へのアイデンティティを取り戻し、再建に向かう支えとなつた。遺跡は震災伝承のためにも貴重な地域遺産である。それが復興事業によって発見されとはいへ、震災復興のために消滅したのは致し方ないことであろうか。

東日本大震災後、大津波に関する膨大な情報と物証が得られている。大津波の情報アーカイブ、津波遺構の保存、津波石碑、これらを遠い後世へ伝承して防災の糧としなければならない。山元町を含むジオパーク計画は自然現象ばかりでなく、東日本大震災の保存と伝承を自論んでいたが、実現しなかつた。大津波から避難するためには、それぞれの地域ごとの民間伝承が大切であり、そのための「しきかけ」や「しくみ」が必要であろう。

謝辞

この10年、たくさんの方々に助けられて震災復興ができたことを感謝します。

「お寺ボランティアセンター」（テラセン）に結集した皆さん。再建に踏み出し、ここまで進むことができました。

「国際ボランティア学生協会」（IVUSA）の皆さん。若い力は復興の推進力になりました。

「山元町震災復興土曜日の会」の皆さん。迷い、苦しみ、楽しみを共にして活動しました。

「里浜ネットワーク」の皆さん。多数の被災地が連携して復興を進めることができました。

谷口宏充先生はじめ「南三陸海岸ジオパーク準備委員会」の諸先生と共に活動できたことを感謝します。自然現象の学習、震災伝承、防災教育、地域振興などの良い勉強になりました。そこで得た知識がこの発表の基礎になりました。

この研究会の発表に当たり、相原淳一先生には山元町の遺跡について教えて受け、発表の機会を与えていただいたことを感謝します。

引用・参考文献

* 1 『希望と笑顔が輝くまちへ 東日本大震災震災記録誌』：山元町：平成 25 年

* 2 『震災復興記録誌 復興の歩み』：山元町：平成 30 年

* 3 『山元町誌』：山元町：昭和 46 年

* 4 山元町歴史民俗資料館の展示図をもとに作図

* 5 「発掘調査現地説明会資料」：山元町教育委員会：平成 25 年～27 年

* 6 『山元町での鉄製産に始まる古代東北の物語』：菊地文武：平成 24 年

* 7 「再考貞観津波—考古学から「津波堆積物」を考える—」『考古学研究』第 68 卷第 1 号：相原淳一：2021 年

* 8 『南三陸・仙台湾地域のジオツアーガイド—東日本大震災による災害遺産を通じて自然の驚異を理解し防災を学ぶ』：南三陸海岸ジオパーク準備委員会編：2016 年

第 12 回阿武隈水系研究会発表要旨集

発行：2021 年 12 月 26 日

主催：宮城県考古学会阿武隈水系研究会

共催：あづま街道探訪会

